信濃奇區一覽

四

ル 4
1686
4

信濃奇區一覧巻之四目録

諏訪郡之部

須波乃海　上下神社　御頭祭
御射山祭　御柱祭　神宝 并 級笠行縢
七木七石　七不思議　下諏方祭
縁起繪　齋甕　石羊
山神猧子　徳本釜　人角
有賀山火

伊那郡之部

天狗栗　馬角　勝間山仙境
真菰池　風穴　鸚鵡石

ル 24
1686
4

鹿塩
竹魚
大島山瀧
雲彩寺古物
蟬草
春田村
立石 石類
早梅花

大河原
駒岳
三足鶏
銅版
神代石
白山窟
大根石

松嶋王墓
光前寺
闘龍
冠石
山吹畸人
園原
深見池

信濃奇區一覧巻之四

井出道貞輯

諏訪郡之部

須波乃海

日本紀ニ元正天皇養老五年六月信濃国を割て始て諏訪の国を置聖武天皇神亀元年配流の遠近を定めあるに諏方国を中流とし天平三年廃諏方国を信濃国に合す湖水の周回三里余ハ以前ハ洪水の無隣に堀りて七湊の名あり渉りてまた陸地となりて今ハ径一里弐八一里半深さ七尋なり西南よりて八深さ増りて我ぞくとらふるをもてハ魚鱗ハ鯉鮒鯰鰻鬪魚鯇魚あり近年小海老を産す先らに浦ありて民家多し漁父あまた有りを業として生計の便よし南ハ後河なる不二なる根を遥にて家に四方は衆山連綿して風色斜ならず此水の落口を尾尻と云伊那郡を流れて遠江へ出る天流川の元となり冬ハ湖一面に氷ありふさ郡て上をゝ人

通路す春は正月の末又年の寒温によりて二月の半までも氷のとけざれば氷の厚さ
凡そ二尺余其上を何程の大木大石を引けども破るゝ事なし氷の上すべる故に樏をはき
て通る其上に雪積て八掌の如く草鞋にて行くなり是る故漁人此湖氷すれば
漁人氷の下に網を引には氷を一所長くうがちて其所より網を入又其先をうがち
竹の竿を以て八方に先の方へ突きやる事すれば其を送りやりて数所にかくのごとくにうがちて
網を操くなりて魚をとる此時漁人は腰に長き竿を挟む若あやまりて落る時は此竿
にすがりて命をまぬかるゝ也と云り昔は此事を知らずして冬春は漁人おぼれ死する事多かりし

此湖を騒人鵞湖と称し二禮詩に鵞湖山下稲粱肥註に鵞湖は在信州鉛山
縣ノ西南十五里ニとあるとかて信州の大湖なれば斯いへるなり

或抄朝年代記ニ云後深草院建長二年二月十四日諏訪神前湖大鳴又唐船出
現行時ノ間ニ消失云々是ハ西国北国にて蜃氣楼をいふと云類ならん

諏訪上下神社

信濃國一宮諏方大明神　延喜式神名帳　南方刀美神社 名神大 月次 二座　日本紀持統天皇五年八月遣使者祭信濃國須波水内等神云々此時始て勅使ありて祭礼有
仁明天皇承和九年建御名方富命前八坂刀賣命ともに授位ある有
文徳清和の両朝嘉祥貞観の間両神ともに従一位正二位を累叙ありしこと文徳実録三代実録に見えたり朱雀帝天慶中正一位後奈良院天文二十二年御震筆を賜て諏方正一位南宮法性大明神と勅謚有　延暦二十年坂上田村丸詔を奉て東夷征伐の時東山道を経て当社に冥福を冀神馬を奉る神験ありて朝廷より田野十町納稲八万四千束を供して祭祀の具に充しめらる

普賢堂　正應五年再興施主 知久左衛門入道行藉

鐘楼　普賢堂の前にあり 撞ハ永仁四年の鑄る

五層塔　延慶元年建立元徳迄二十七間 九輪治工甲斐国志太法道

廻廊　建武四年九月十七日立 鎌倉より 西角丹後奉行として来る

須波湖

ちはりあまや
日数重ぬる
志き波路に
ましる富士の根乃
めならぬ
あひぬる

烏丸光栄卿

湖水涵虚濶
鏡中浮万象
波底群峯集
總入漁人綱

釈萬菴

群山環抱儼成
攔中貯平湖青
鏡清君看芙蓉
涵影処天然玉
女洗頭盆

釈六如

上諏方社大祝諏方氏ハ當社の神胤なり 百桁抄云秘説曰諏訪明神ハ三輪明神の子なり 神家ハ即諏方ノ神の子孫ニ以テ荒造ト云説之
平城天皇の御宇女子有て男子なし 於茲桓武の皇胤有貞下向ありて大祝の聟養
子となり社務職たり是を伝表衣祝といふ大明神有貞に託して宣く吾に體なし
祝を以て體とすと云 因茲大祝代々神職相続の時雛冠社に於て伝記作法を
以て立烏帽子麹塵の狩衣紫の指貫を着し明神の正體と称す大祝職の
内ハ常に葦無俣の褥に坐し死穢の復を去ん住宅をいて神殿と号す文禄
諏方の外に出ず若大祝職のうち小卒去るあるハ先神前へ被て不時門
より出す此時にあり初て卒去の披露す

五官
神長官 守矢氏
禰宜大夫 守屋氏
権祝 矢嶋氏
擬祝 伊藤氏
副祝 長坂氏
西奉行 矢嶋氏 花岡氏
御釼持 宮嶋氏
其外畧

守屋氏ハ物部の守屋の二男苐君と号する者森山に忍ひ居て後神長の養子
となる永禄の年中より官の一字を除て神長官と云森山に忍居の主を
祀り今守屋か岳といふ苐君より当神長官まで四十八代と云々

社僧
善賢堂別當真言宗 神變山神宮寺
同宗 七嶋山蓮池院
同宗 秘密山如法院
臨済宗 慈寺末 鷲峯山法華寺

御頭祭
三月酉日本社より十八丁を隔て前宮に十間廊あり 往古ハ麻柱の実横廊と云今俗に十間堂と云 上段に一百余
の燈を以て鏡を挑猪鹿の頭七十五俎にのせて供ふ 俎ハ松板を三ツに切四角にあると見く 饗膳の贄ハ郡中国中出て
十六箇村を頭村と定め十六年に一度づゝ祭るを勤む其年の頭村より十五歳以
下の童男一人を神使と号て出す 古ハ六人之ハ苐一ニハ伊奈より出る二人を外縣介外縣宮付と云 二ニハ西方より出る二人を内縣助内縣宮付と云 三ニ佐久より出る二人を大縣介大縣宮付と云
三十日潔斎させ水干に刺袴細立烏帽子を着て給仕せ流
鏑馬あり此祭ハ往古鹿狩の畧を表せし 故に夜祭あり一の炬火ハ一番手の

御りを知らせぬなり又二の炬火ハ二番手三の炬火まて終る今ハ其形ちのミ也文長七尺の柱ニ流鏑馬の矢二本を結付四本柳 楉ニ 辛夷 の枝葉を取添玄米を麹と共に盛り神酒を清酒と 又柏 酒共 云て槲の葉を包串ニさして柱ニ差込是を御杖又は杖柱と云此柱を飾立て神使の騎乗あり藤皮を襷とし一人にて腰ニ二丈五尺の麻布を付神条を三回し此時参詣の群衆声を揚て騒くを以て揃へて祭の終とす此祭様々の式あり俗ニ御組掛と云

新葉
ひとゝせにあふ瀬ハ神の御社にみあれ人々もありし神のちかひハ　宗良親王

御射山祭

本社より三里を隔て辰巳ニ当て穂屋野といふ地に御射山の社あり七月廿四日青萱にて数十形の仮屋を造り廿六日大祝八角の級笠穀葉藍摺の直垂菅の行縢を着し騎馬にて五度両奉行従ひて御射山にいたる黄衣の神人白旗二本を持青萱葺の神殿の左右に立廿七日午刻毛髪を鬘に萱穂をもつて奉幣あり斯時日月星の三光を望茶店売物を出て町屋の如し相撲あり近在の士民群集せり三日三夜を歴て祭終り仮屋を取棄ひとまま原となる

玉葉
花すゝき穂屋のめくりに吹かへし夕ある秋のみさやまの風　金刺盛久

御柱祭

寅申の年七年に一度寅申の日本社より五里を隔て御小屋か嶽に生る樅の木八本を伐る是を御柱とあつて三月寅申日神川の辺ニ挽出し口径丈八尺より五丈余の大木八本を伐る是を御柱とあつて三月寅申日神川の辺に挽出し長十間ひく鉄炮二十挺弓十張鑓十本郡主より出る騎る多し大祝ハ馬上ニて 雨天の節八上輿 八角二蓋の級笠を着五官其外各騎馬にて此騎るの前へ同朋一人素襖を着大太刀をたき白布の抹額をしめ木作の大脇差刀を荷て立これを力士となづく 大祝の刀共柄長き衣ひしやくを持 郡主の騎る八十二三の小童あり次ニ子る遠の騎馬警衛して御柱二本

本社に立二本ハ前宮に立惣て四本西社より立但宮遠の人夫ハ初日一本次より一本立
是を御柱祭といふ近國より參詣の群衆夥し
此年萱葺の宝殿一方を改造り六月寅申日神宝を新殿に遷す神輿の上
覆黄鈍の綿七年より一枚づゝ掛る故に厚さ尺を重ね下ハ切て落る其上より
常の綿を覆ひ五官ゟ奉行これを勤め社僧の草傍まで法事を勤むべし
外年中神事数多し
七種神宝
八栄鈴　真澄鏡　根曲宝剣　御宝鈴　三組一組六箇
御宝印　以上　其外神宝数多し
此宝鏡ハ寛政十二年の春山本の口氏三郎左衛門といへる者の子八十五郎同友[illegible]童
ともに薪を採に守屋ヶ岳に登る半途にして𨀉路の傍に光輝の物あり怪しく
て穢をはらひ土を穿れバ一箇の鏡を得たり径八寸余厚五分周廻八葉光輝人を

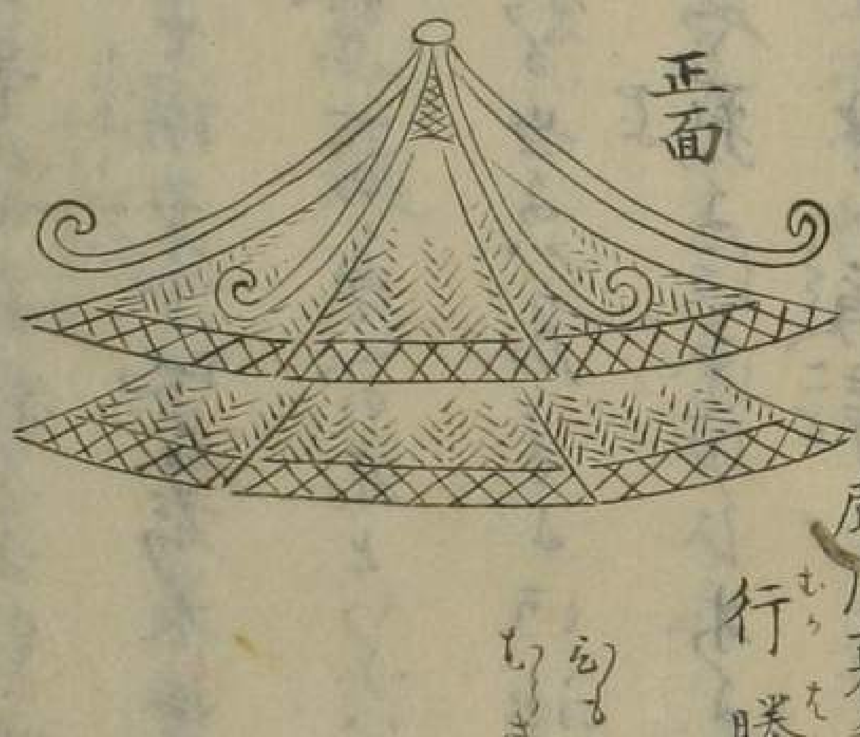
古鏡略圖

径八寸五分
厚五分

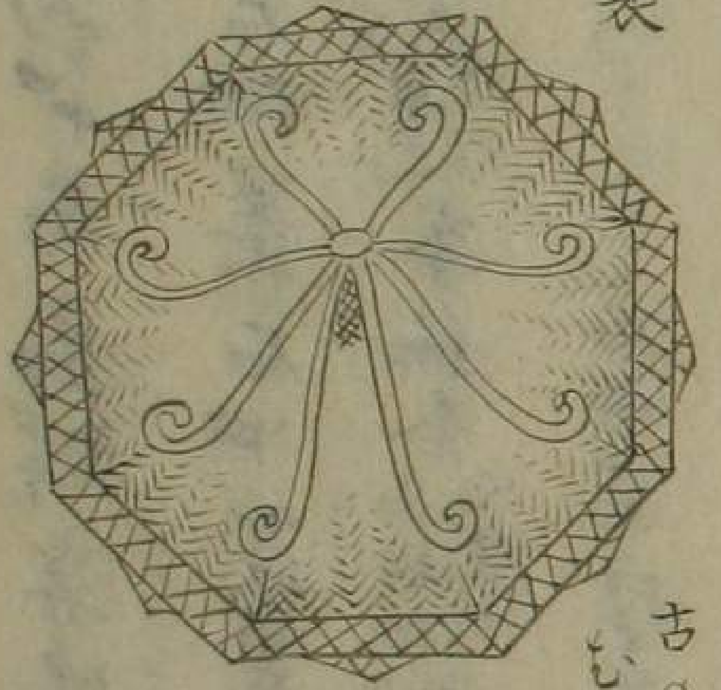
照を敬ふより望て又秩父邑長に謁村長官吏に術ふ官吏揖ずして諏訪
侯に寄る侯褒賞して八十五帝に米を賜ふ侯人をして是を或何某に寵宮の
ることを請ふへハ是千年外の物蓋鳳馬鏡なりと又肥州の唐津侯に話ふへハ唐津侯
長崎の有士に命して訳士を以て異域の人に視せけるに清人熟視て曰鳳馬鏡の既代
背に麒麟鳳凰の鋳形あり銅色粹美なり是漢代の菱花鏡之當前魏武帝
蔵として是を家すと今を距ること三百余年偶日本に来り此珍品を観ることを
得たりと感歎せしとぞ今は諏訪の神庫に蔵る

副ノ祝長坂紀明翁之記ニ曰天正十年三月織田右府欲ノ滅ニ峡之武田氏ヲ而師ヲ
十万余騎ヲ而亀スニ當郡ニ此時當社罹ニ干兵燹ニ神社宝蔵悉ク為ニ灰燼ト也
於レ是ニ巫之輩荷ニ神輿ヲ負ニ財宝ヲ運ニ送ス干守屋ガ岳ニ山中険路而隊ニシヨ竟ニ
失ニ其ノ所在ヲ二百余年湮没スル者ノ乎不ル然ラ樵路ノ危険何ノ故ニ在ニ于此ニ焉哉云く

八角二蓋級笠　又綾笠トも云
緑五色錦白糸なそ十文字をりけるあぢろ八角な組径一尺二寸許あるの木あいの皮厚サ五リニ幅五分



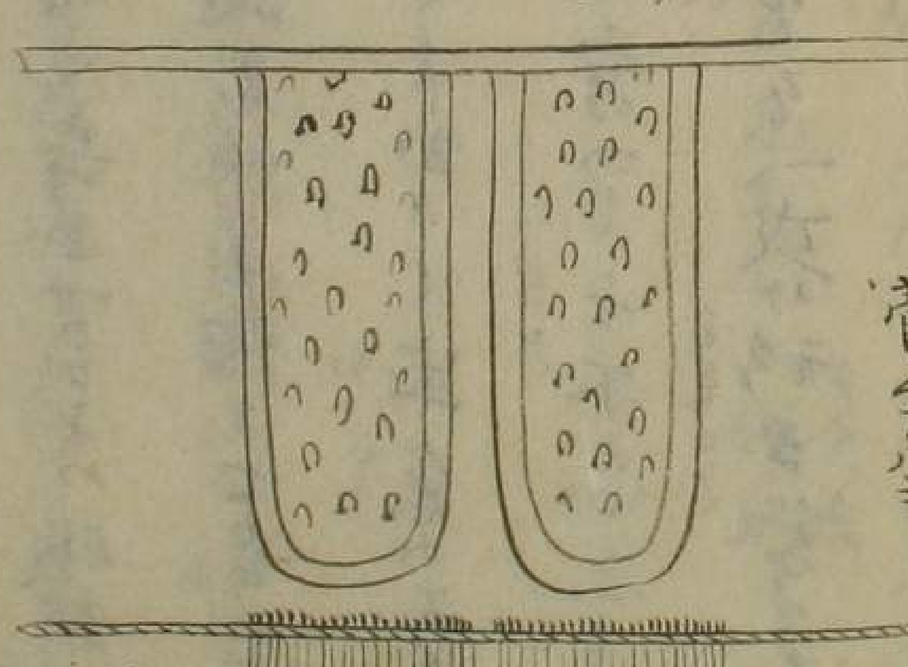
八角ハ一筋ツヽ幅五分許厚一分五色錦にて巻二枚の間ハ檜曲もの高二寸径八寸白木

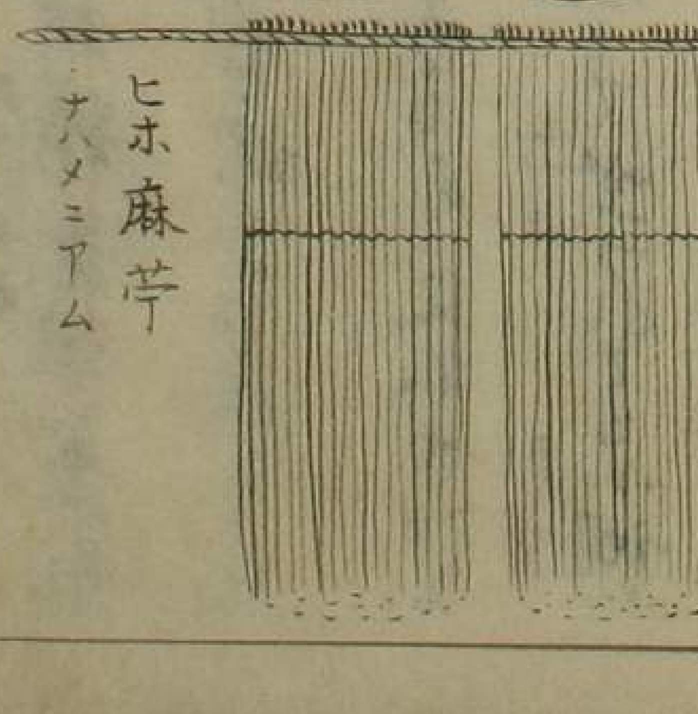


御柱祭 御射山祭の節
大祝着用

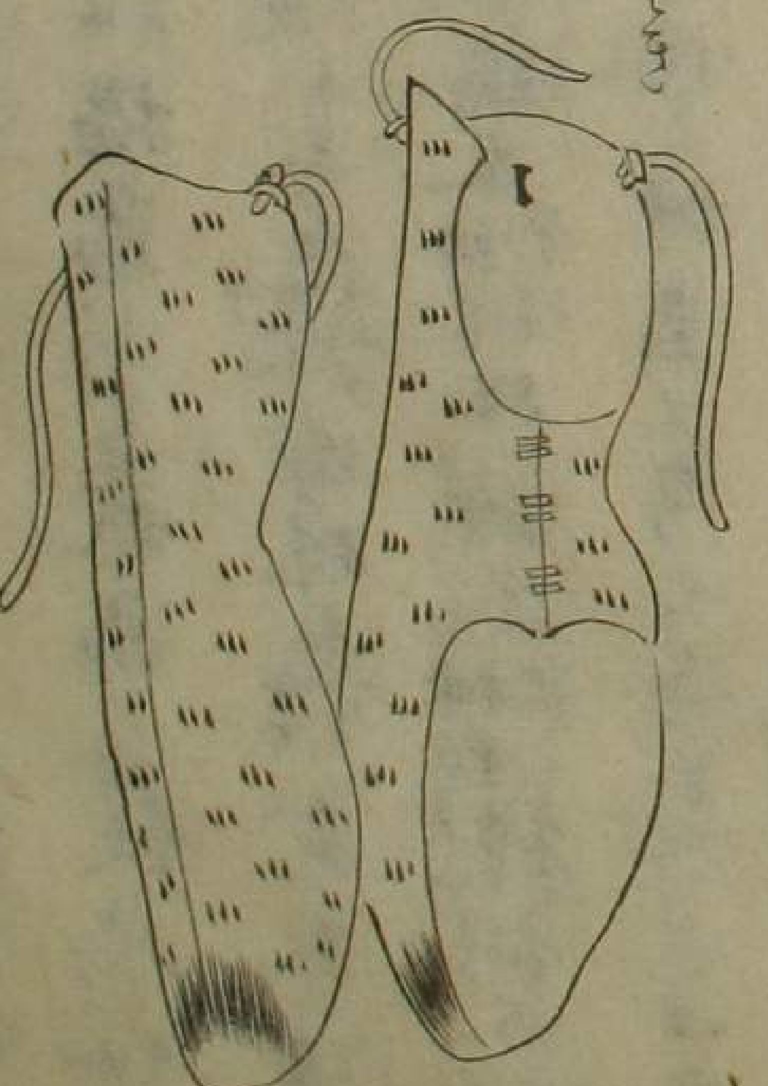
打線紫

鹿皮夏毛
行縢





古のむかばき



七峠　杖突峠　有賀峠　三沢峠　四谷峠塩尻　餅屋峠和田　大門峠和田　蔦木甲州

七嶋　宮嶋中社　藤島田中　高島下桑原　浮嶋有賀　福嶋　白狐島　飯嶋神宮寺道

七石　御坐石上社　御沓石中社　蟇石同　小袋石杖突峠下　小玉石　御硯石守屋山　亀石宮川内

七木　櫻稱木栗沢村　檀稱木真志野村　峯稱木高部村火焼山　檜稱木神ノ原村　松稱木神殿辺　橡稱木室内村

柳稱木矢ケ崎村

不思儀と云是ハ七ゝの数を云のミにて奇とするにハ非ズ　石尸の数も七種の神宝七考七奇を加へて四十九

新著聞集に七木七石を載て誤多し　地名考木曽路名所図会に七奇を誤る

河合弘湖の漫録に七の名への木といふハ今なおありて宝倉の石もあり　又木さだかならざるもあり　上れる世にハ名ある社の宮のことに木高ありて生ひ茂る小祠ハ

いかくするにしとろや数に注連ひきある幣をへ或ハ形異なる石の面に忌籬ひ

てを垂く斎場とし神に稱辞まをしおろかまけるゆゑにての木といふなるへし　已

或ときに室内といふ所の橡の木のもとに不思議に住しに歳を尾崎田と云処ありて古き陶の欲る多くありしをもて　これハ諸の木の下に供物しけされ神祭せ

し跡なるへしと云々

七不思議

湖水神幸　湖の方冬始て氷ありて寒三日或ハ四五日の頃上の諏訪より下の諏訪方に

かくて横幅五尺ばかり一夜に発縦に通りて神下の宮へ渡りしとて是を御渡と云ふ又神

幸ともいふ此渡なく渡る人てこの御渡ある年ハ渡らぬ年なりて御渡のかゝる所

諏訪より何なるハ所を取して不よりて年の吉凶を卜知す　下ハ大和か演より南宮州神か辺まで八吉之又大戴口を方嶋

北といふ

元旦蛙狩　辺をハ名志の御手洗川中冬の頃より流ときて氷を砕ぬしく　正月朔日の

朝有司斧鉞をもて堅凍を砕ハ蝦蟆蟄爾つゝるこれを二ツ捕て神前において小弓

をもて是を射て牲と号て備ふるなり　是より毎歳不闕の奇瑞之　御手洗川ハ神前の渉まり有司ハ五

宮中の輪番之○五穀筒粥　正月十四日社中に於て五穀と葦筒を釜に入粥を煮て熟せ
る時是を開中へ入る穀物の多少にて其年の五穀登の滅否を占ひ知るなり」
「天正後祭」高野鹿之耳割　三月酉日の祭礼前社十間廊にて修行あり神酒
七十五樽一斗入猪鹿頭七十五贄に備ふ此は年中諸方の猟師とり得る所の鹿を献ず
若数不足の時は魚鳥の類を添て中にも年々必耳割の鹿あり　高野は前宮御作田の辺なり
六月晦日海浴の社にて職掌の者年来を奏し苗を神田に植る既に三十日を経
て登る八月一日之を炊て神供に備るなり　天正後祭○葛井清池　大宮より二十余
町を隔て寅卯の間に葛井社に池あり其深きこと測られず木葉池に落て浮ぶ
十二月晦日社人供物を器に入水底に沈て奉るなり遠に遠州鎌田の池に出現すと云伝
ふ又葛井の池の魚はとる事を忌るなり　同○宝殿點滴　年中毎日萱葺の宝
殿の檐より雫の絶ることなりこれを社の図とは此下に天流の井あり是を天竜川の
起源と云」　七不思議　神秘　此外塔の頭の畔一年にして蛙の声有其の子は七竒の部にあ
らん」　社頭古は山本の郷なり後醍醐天皇正中元年改て神宮寺村と云　社領千石
下諏方は社領五百石　本社健南方命相殿に兄神事代主命を合せ祭る社頭の奥に
父神三輪の神を祭れども社はなし只祭式のみなり本社二ヶ所和田嶺へかゝる所に
社を春社といふ上諏方への往還の町の南に有を秋社と云正月元日午の刻神輿
を秋社より春社へ遷し大祝五官騎馬を粧ひ伶人伎楽を奏して供奉す七月朔日
春社より秋社へ遷し元日の如し鉾十二本長き幟数百本幟数十本鞍馬数疋弓鉄炮
等は郡主より出る廿日は御船祭とて青柴をもて船の形を作り事代主命の像と
夫婦二神の像を作りて上に立数百人裸身にて之をかき三度社地を廻りて秋
社に置るといふなり
神功皇后三韓征伐の時両社と住吉とを神と祭りの時には海上

も雑ふ兩軍勝利しけるとぞ　近船祭ハ有る　文化十年出羽の國庄内の者四人船
出せしに暴風吹起り船も既に打碎しを當社を祈念して浪のまに〳〵漂ひし
に荒和布の多く生繁りたる處に至り一日二日浮ミ居る稍風も志つまりて渚の方に
助けられ皆恙なく上陸しけれハ也かれ其あらめを刈とりもて寡しに還り來り
當社へ献せしことあり

七月の御射山祭ハ本社より三十町余山中に假屋を造り薄尾花をさしふきて廿六日詣て
祭礼修行し廿九日下山す　惣て上諏方に同し　蓋古雅のさまなりて世類なき
神事なり　古ハ三里山中に入る　今も其地に至れハ多く古銭など拾ふ事あり　寛永通宝などより古固左に出ると
春社より十町余七五三山に登り注連を曳是を山口祭と云　御柱祭ハ寅申の年正月十七日　同廿三日山中二十町斧立
社に神酒を供へ杣人潔斎して八本の柱を伐りて兩社を营替て四月寅申の日七日前
の夜数百の灯籠を掛庭燎を設宮の□小釼りサを滅し神躰を新社に遷す　明五日八

本の柱を曳　寅申の日四本春社に立　七日過て四本秋社に立るなり
下諏方大祝金刺氏ハ神姓なりしが欽明天皇の皇子金刺王社務職たりしより金刺を姓
とせし　後醍醐天皇の御宇中絶し今ハ武居祝氏族の内十五歳以下の童男を大祝とす　十五歳の後ハ
替るなり

五官　武居祝 今井氏　禰宜太夫 桃井氏　權祝 古田氏　擬祝 山田氏　副祝 山田氏
其外　若宮祝 今井氏　宮津子祝 上原氏　檢挍大夫　小萩祝　宮嶋祝　天王祝　等

社僧　秋社 神宮寺　觀音堂三層塔有　春社 觀照寺　薬師堂有 萩倉薬師と云
右寺ハ何れも真言宗にて弘法大師の開基と云　空海の筆の経文一巻黄絹の袈裟一箇武居祝家に傳て有

當社にも七不思議と称するあり
御渡 付上　八栄鈴 當社神宝の内神秘なり　御作田 神田六月晦日稲を植八月一日神供に備 御作田社下諏方町北の方町末に有神田有
浮嶋社 此所ハ砥川左右分て上古より水溢れとも此嶋に入す則六月秋の地なり　根入杉 根ハ方々に蔓てよく栄へす 秋社の前にあり

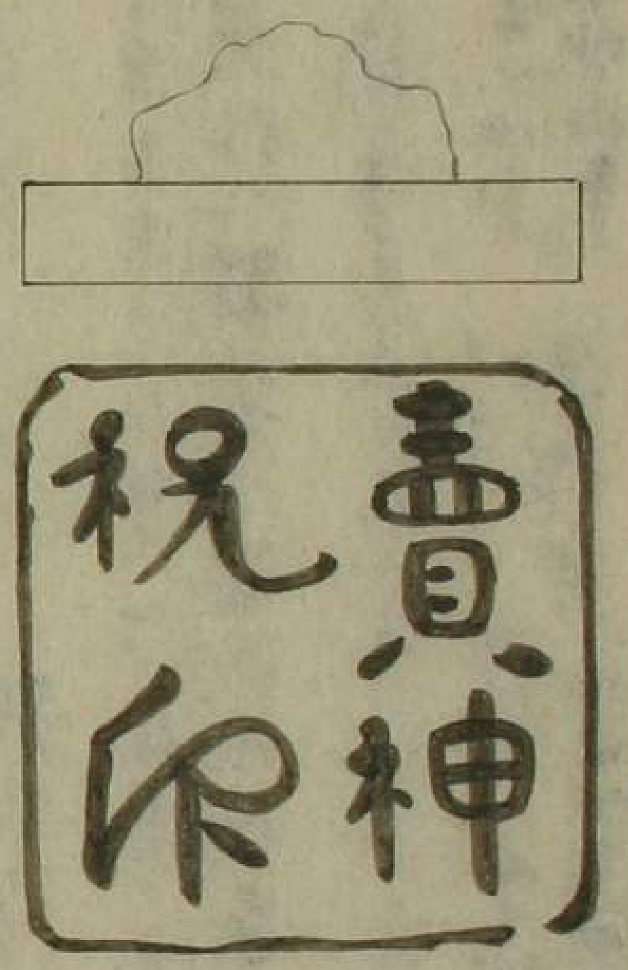
鐵印全圖

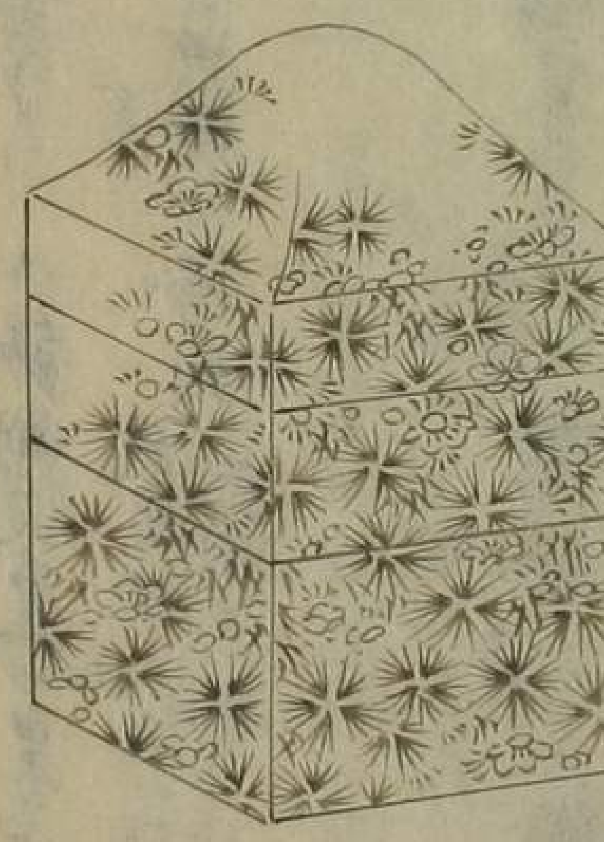
鈕

下諏方ニ傳ル賣神祝印ハ平城天皇より下シ賜ル鉄印なり賣神ハ八坂刀賣命なるべし

鑌 赤銅

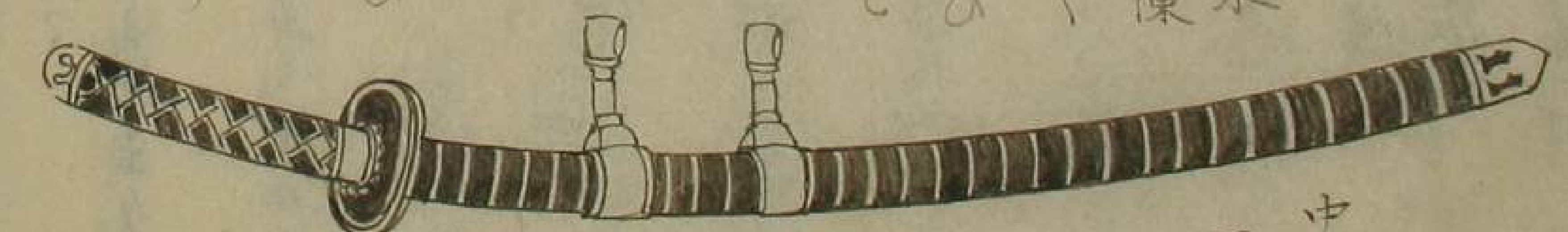
上ハ蓋下ハ肉池





縄切丸太刀

元暦元年佐々木高綱宇治川先陣の時此太刀を以て水中の縄を切拂ひしより縄切丸と稱す後當社ニ奉納こゝにハ常の太刀の如柄鞘とも皮巻也金貝赤銅無地鐔ハきまひ皮を赤銅うてく包む三枚合なり



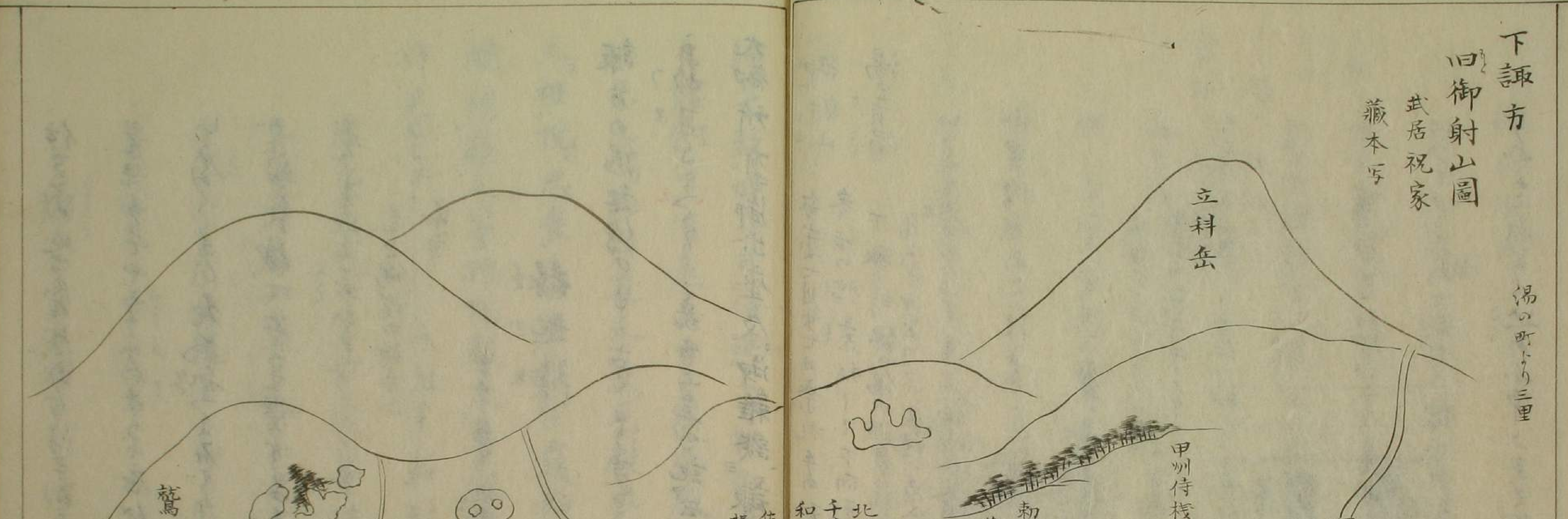
中身二尺四寸五分

銘鑑ニ云 縄切丸作 着備中国 青江住 右衛門輔 安ト有 實ハ貞次なり大治頃の冶工

御射山 毎歳七月廿七日祭礼 手の刻日月星をも照臨 参詣の緇素拜して下向を

湯口清濁 下諏方町 綿の湯ハ温泉ニ而社神拆誓によつて涌出すと云 尚ニ不浄をいふ若穢の者入湯する時ハ湯忽濁ると云

いふも昔のことき男といふも昔の底き男とおもひて妙あり大男いひける中吾に小男侍とあらぬ紀るきものハあしもし 既に婦子が智なあしびハ物門の恥ぐめとかしこくて英雄の勇ニあしびハ手金の弓をもむかしくなる一しミ尺の太刀ニ尺 南留別志ニ古ニ三尺の劔と云ハ今の二尺寸五卜なり おきぬ 一身のうぎり小蔵ならん多まく多時宿字まのらぐニあひて鼻あふきのころハ揺ろうも添外の傳不嗅あそるうたてまの誇なしぼや野説うきの眉逢ひ川縁しニハふ依りするやうて私ねしのこる頂礼ニおるや釈の日ニぞく管ひる韓ひこそ是非まられとあぞこしくり 山小男後あしりれど大山伏小ひたまされてあづく使ひけるとにやぐて諸諸の口き湯ニ至りぬ 葉略村の人ニそれぬこれなと山あふ中ふあちやうの昔いるうきぬ 湯壺のうちふもちと玄蔵しぬ


下諏方
旧御射山圖
武居祝家
藏本写
立科岳
湯の町より三里
甲州侍棧鋪
勅使
御棧鋪
北條殿
千葉殿
和田殿
佐々木殿
梶原殿
社家
棧鋪
鳥居
鳥居
御供所
神楽所
甲州侍棧鋪
カイル石
天龍河源
北川入湖水
コハミ水
信濃侍
棧鋪
海野
望月
根津
東
西
鷲カ峯
虚空藏
東西一里許
鎌池
七嶋八嶋ト云
東山道
萩倉新田
下諏方ヨリ登リ口

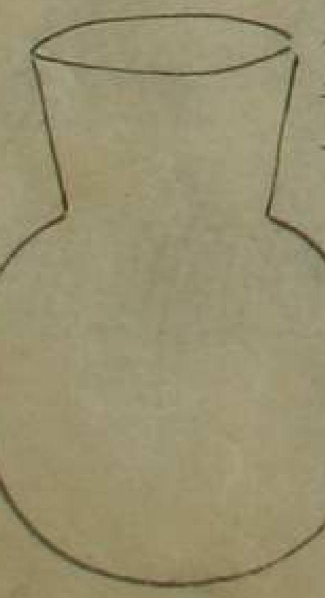
傍なる婢のぬれころもほしたるかいかなき大男か眼のちたゝきのこ小男かこゝろに小
言味ありてやありけんさらは言ひよる僕しまへとるとさしの肉口をあきれらひく
いろめくうさひ秋風吹つゝ石きりしてあまりのうれてひ手を携て泥にくふぞさし
ぐふさ紀織にぬおて候すなるまさるか鶴の赤脛をゆきたけあまるとど九裸を
らんまりと舞ひあへりしとなん

ひさご　是を絶活の酒白に入込て諏訪の湯の中にまうれ
前句
ありふれ脊ぬれたらき山ふし　曲水
はせを

縁起繪

諏方の縁起繪のことは古くより中原の康富か日記にも出たる宣長か
玉かつまにいへり　嘉吉二年の記に云同十一月廿六日参伏見殿候宮御方御讀
大御所有御出座及御雜談諏方縁起繪一巻有次申上候処未夕被御覧之
繪也致媒介可借進之由被御暈可申試之由申上云々　同十二月一日　諏方縁記
之繪巻十二巻可借進之由自伏見殿被仰諏方将監候間其由予令傳仰令
持来之間即同道参伏見殿件縁起幸櫃借進上之庭田中将被取継
之被悦思食之由有御金覆輪一振被下諏方口口件縁記外題後光厳
院被遊之等持院殿毎奥被載御名字者也予去丸夏比於伊勢兵庫助
辨見ス云々

後光厳院ハ人皇九十九代　等持院ハ足利尊氏之謚也此縁起繪失ニ所在
年浪草ニ曰此象ハ遠く立魚と射て進らすなる其始ハ田村麿将軍の安倍高麿
を伐人とあふに信濃国へ到り此神に祈り申されしに梶の
葉の紋付し束帯着る人湖の汲よう　齋瓮
つゝきを鵜せて笠羽をもて彼御神の現し給ふ如くなり

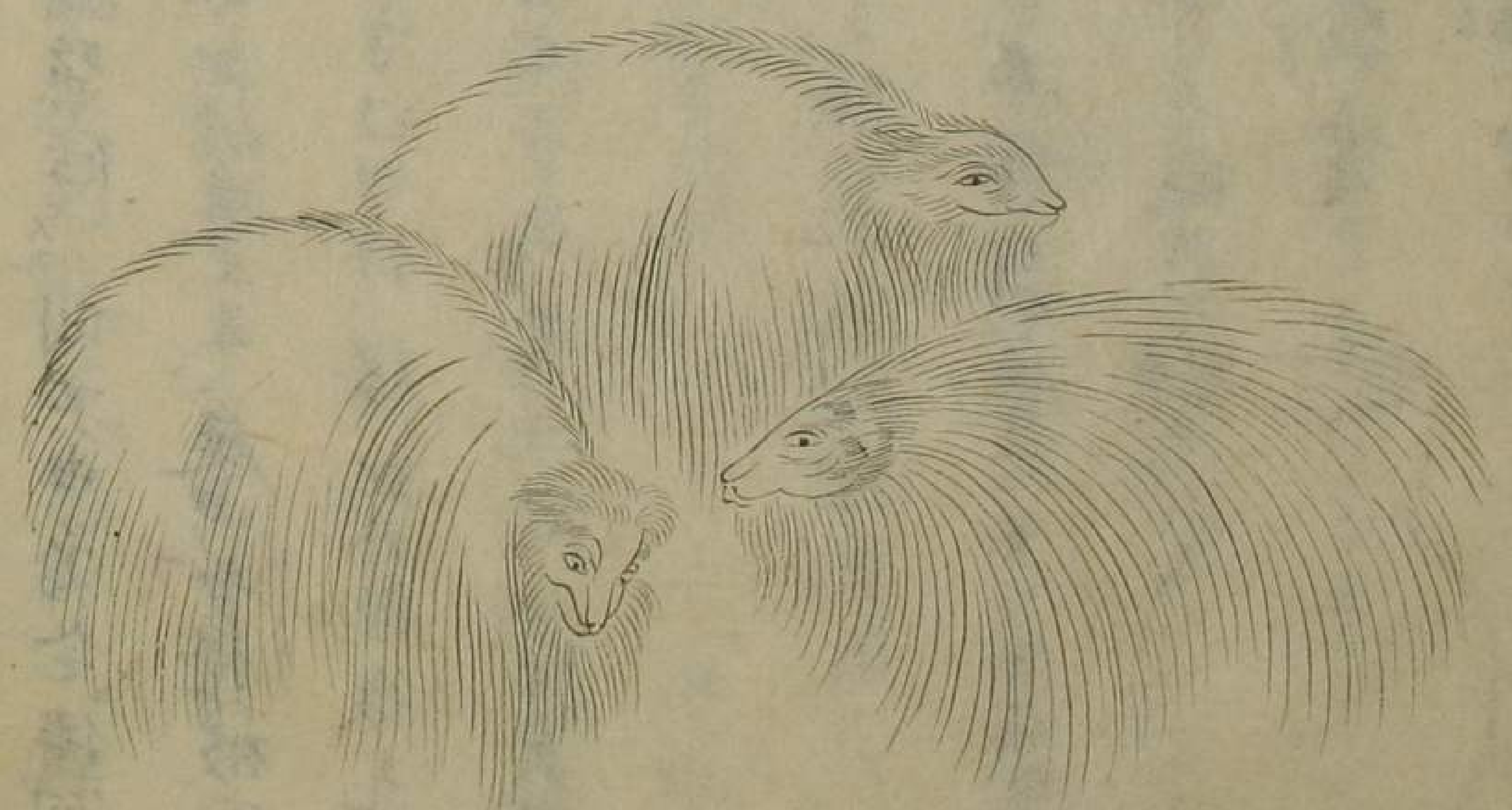


とて越後過海とも記て謌有とゝあり
と彼縁起にあり云々

元文中神宮寺村竹居と云所より穿出ス
古代の神酒の器也今権祝矢嶋氏蔵之
蔵す

石羊

矢ヶ崎村の北に永明寺山とてさゝく峙る
松山あり此山南面の中腹に谷ありて大なる
岩石数百畳くたりて石間に洞をなし
穴をなして所々に其下滴水小流をなせり此
内に異獣ありて住り大さ鹿の如く毛色も
又鹿の如し中に黒白の斑あり頭ハ小し惣



身毛長く垂て四足を隠して常に出る事稀なり炎夏暴雨の後ハ出て蚯蚓を穿つ
如し村里近しといへとも見る者少したまたま見し者驚きて石羊と云又毛長貉被
貉なと名づく群をなさずといへとも其数二十余に過ずとそ其里の醫人河合正阿父子
伴ひて麦草を穿に跡き三十間もかりと隔て見しよし此図正阿か見しと云
状をもて此に寫せり

山神の猴子

八ヶ嶽の辯槻の木杉田の上老木の腔の中に小獣ありて住これを名つけて山の神の猴子
といふ鼠より大きく猫の子の如く鼬のことくにして尾短く脚も短し冬月霜の降頃
出る趫捷にして善走るか故にこれを形竹窺するものあれハ毛色黄なるもしく
淡白淡黄或ハ黒白の駁あり

木曽にて山神のオヂヨコと云もこれに同し
安曇郡にもある貂鼠の類なるへし

徳本釜

東堀村に名醫徳本の墓あり此人族姓ハ長田氏乾室と號し又知足斎と号し
一艸庵を結びて茅菴と号い永正の末に生れ三河産なり詳ならず或甲斐といひ
信濃といひ美濃といひ三河といふ各異なり不知東堀にてハ肥前産といへり寺に
醫を業とし甲斐にありてハ富士の麓にて薬を採信濃にてハ木曽山中に入て薬を採
ありし一家をなして沈痾痼疾と云ともみな立ところに愈すなり皆羅山
林先生道春の家に在先生幼にして翁に讀書をならひ常に薬嚢を頸に掛て四方
に周遊し名利をもとめず薬をうりて價をとる一帖十八錢に過ず文禄慶長より
元和の間まで行ちる久しく甲斐国にあそぶ故に世に甲斐の徳本と呼ぶ或時高
貴の御方御病ありて召れしに薬餌調献し薬り速に功験ありて厚く賞を賜る
〳〵しとありしかも更に辞して受ず例の十八錢の價を請ひて去りぬて後患者命有
て恩賞の御沙汰ありしかハ友人に家ゆ紀を患ふる者あり此方の宅を賜ふ下に於て
賜にひとしといふ即甲斐国山梨郡今井村にて六町四面の地に金を添て賜りぬ即其
者を呼ぐなみ彼地今に徳本屋敷といひ傳ふるとぞ又或時乞丐の病ありて薬を請
しに十八錢なしやと問ふを答られハ汝が薬を飲すあへてらんと命じしとらひしと
なん下ニ而東堀村に来て住ること年あり御子柴氏の女を娶て一男あり寛永七
年庚午二月十四日病なくして終る壽百十八歳といへり一男ハ交名長田孫左衛門といひ
し父子の墳墓今松東堀村の南松林の中に依然として存せり由伏の器釜
一ツ御子柴氏の家に傳へて藏す

碑面　乾室徳本庵主

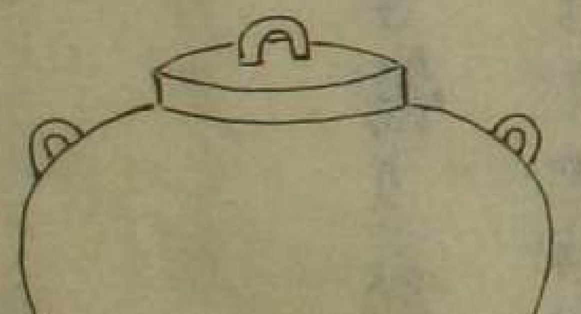
梅花無尽翁と云も有て此翁の作と云或ハ
撥出なりと云又斎方十九方と云有

徳本所持釜

長六寸三分

径一尺

蓋六寸



伊那郡之部

天狗栗

伊那郡ハ諏訪郡の堺より遠江参河の国分界に至て三十里に餘り一郡上中下とわかちて寒暖も又ひとしからず天竜河南に流れて土地下るにしたがひ中伊那より下に至りては暖気稍まさりて他郡に育せざる草木多し又土地によりて木生の異なる物あり茲に諏訪の三沢より小野へ越る嶺を三沢峠と云山嶺より三丁許下りて所々に天狗の栗といふ物あり樹ことごとく屈曲して細枝下に垂る柳桜の垂るゝが如し木の芽ふく頃ハ紫なして花の發るが如し実ハ小く従来天狗の栗と稱して取る者なし此木他所に植るときハ伸て屈曲することなしといへり

風穴

浦村ハ入野谷の奥にて此地に風穴あり前浦奥浦の間山の尾崎に松柏繁りたる森あり中に屈曲して岩の重りたる間に穴ありて常に風を生ず此岩を動し或ハ岩を穴にさすれハ必大風吹出て荒るゝ故に其辺の人の常にいましめて禁しむ此岩の上に風穴明神の祠あり嵐除の為に祭るなり

此里の畠中に塚ありて上に石碑あり文字分明ならず土人傳へて小松惟盛の墓とも長久寺といへる所に松あり一箱常葉大信士と志るせる口碑に傳へて建保二年卒といへり平家物語に惟盛潜行して熊野浦に到り海に没入せしを見ゆれども國史略に惟盛海に没入せるにあらず晦跡して伊勢國安濃郡に潜匿し兼元四年三月念八日五十三にて病没せし邑中に其子孫存せる者二十一家隷属のもの二百五十餘戸ありといへるハ此地に来れるも知れず中村元恒か信濃奇談に山室村遠照寺に於傳つる古記文に康暦二年六月小松四郎源盛義と志るせるものありといひ此地に小松氏ありて宮下村の墓も

それらの人なるへし氏の同しきゆゑに惟盛と誤りけるにやあらんや云々

勝間山仙境

高遠城下より十町あまり東南に勝間といへる山里あり端山の中なれと高山幽谷ありて湖鬼の子に 竹龍漫筆ニ曰コキノコハ叡山の無動寺山又日光山にも有り 呉越春秋ニ胡鬼樹木艸ニ都捻子此二品の内なるへし 後水尾帝の御製つくはねのそれにはあらてこきのこの月ハ本にすむらし山法師の高きみねくらや名高き山のくらまん葵の類を生す此地に云つひあつてハ鬼にまさりてこそすれコキノコをたゝらまんとも云なりあり山あり又二里計南に袴腰と云山有 一ニ戸倉山とも云 川下より見れハ山の形さなから袴の腰に似て三つひ南の峯続きにあり此戸倉の山近を仙境といふ三つひの峠よりかしく東になりてそつらふ平旦なる所あり中頃のことやありけん此所に庵を結ひて住者あり青き牛にのり髪を被り角頭巾を着て茲に遊ふこと年久し常に大二疋を飼おきて市中へ下して雑用せしか或時この犬狼のために害せられぬ夫よりハ終に青牛に乗て市中へ出ぬ後終る所を知らす里民称して青牛道士といふ今に口碑にのこれり其庵の跡今に井水ありて湛へり旱年には土人此所に行て雨を請ふ山上に道士の祠て聖権現と称しまつる感應霊通大徳を彰し石碑ありて祠と並ひ立り

葛麻山歌　天山

蒼顔道士跨青牛韜晦
葛麻山中遊薜茘之衣
小角巾捧飯自
供藥由傳叩角
何歌堯舜禪求
微道徳老聃流
書巻不須掛角
只唯有真形背

裏ニ留ル峭壁且刪ツ虚無ノ宅従来轉タ與人間隔レ修真ヲ毎ニ唱フ京道ノ
歌銭年カ研精煉白石ヲ一旦沖翩メ上ニ青天唯今只見飛昇跡
顱骨従来不可尋牀頭不見雙玉舄棲ニ止孤峰ニ擢ニ高表ヲ攀
来白砂空ク皎々仰瞻彩雲蔽テ點綴下瞰寒谷抱繚繞飄風
時又動天籟ヲ恍トシテ如仙樂度ニ縹緲世上今無真詣ノ傳堪ヘ惜ニ仙境
供ニ臨眺

高遠藩士 坂本俊豈

馬角

高遠より南一里余ありて新山の内に蓋尾といふ里あり寛延元年其処の農家に
のる栗毛の牝なるか三歳なるか両耳の間に一ツの角を生ス春より出て落たる
又其跡に一ツ角を生ス是も角ハ落て又生するを都て三度之を持しか落るハ忘
られ後の角ハ功徳院へ納め今其家に傳へて有とかハ弊へるの時の角ハ色ハ

うち黒く牛角のことし

長二寸八分
廻リ一寸四分

國史ニ天智天皇七年自常陸国献有角
馬ヲ 前漢書曰文帝十二年有馬生角呉ニ
右ノ角長三寸左ノ角二寸 又成帝綏和二年
二月大廐馬生角在左耳ノ前ニ圍長各二寸
晋書曰武帝太熙元年遼東ニ有馬生角
在ニ両耳ノ下ニ長三寸同安帝隆安四年十月涼州ニ有馬生角云々
異國にも珍奇の事としるして歴代の書にも載たり
本朝にも諸寺の宝物にするものハ多くハ身延山にもあり 瓦礫雑考ニ
云周祈か名義考に古詩に菖蒲開花馬生角とあるハ世になきことのたと
いひし之但シ呂氏春秋ニ人君失ヘハ道ヲ馬生角又京房易傳ニ臣易上ニ

政不頑馬生角をえへ、これハ禎祥の物にハあらじ

鸚鵡石

大草の里の黒牛と云所に風穴ありて風を吹出す事扇風の餘りたるに比すべし
其麓の竹林の中に鸚鵡石あり言ハ石に向ひて云ごとく對ふる之謡鼓之弦
ころころくの声をなを除子を備ふるが如し
東涯の遊勢志に勢君前ノ瀬村にある石あり但此石ハ四面の為ハ声にて對く
不審なる事あり又志州の海辺安楽島と云所にもありて同言石と云唐
鄭常ヶ洽聞記に響石と云ふこれと同じ又雲林石譜に見えたるあれも石
八色の似たるをもて名付海内奇観に見えたるあれも石ハ其形の似たるを
もて名付しとみえたり斉諧録に出たりと云々

真菰池

和漢雅小所不知の名所の中に真菰ヶ池と云池あり是ハ同名多かるべき地名なり
伝へ云むかし貝沼村に貝沼某といふ人住けり武州将に出て池に鴛鴦のたはむれ
遊ぶを見て雄の首を射切りて其後まゐ鳴をも射殺して是ハ初め射たりし
雄の首を羽翼の間に挟みて居りたるを見て発心し僧となり此所に草庵を結びて
誦と居ふ寂して後鴛鴦院東岳玄光居士といふ年代ハ不知其後此草菴跡
継てすみし玄光居士を開基とす鴛鴦山本光寺といふ頃寛永といふ僧房長
三年の建立とかや此事を村にして池を真菰ヶ池とて今ハわづかの小池あり
毛詩品物図攷ニ曰崔豹古今注ニ鴛鴦ハ匹鳥雌雄未ダ曾テ相離レ人
得ハ其一ヲ則一ハ必ズ思テ而死ス故ニ謂匹鳥ト此方ノ所ノ称屋鵝ハ是鸂鶒
鴛鴦ノ一種ニテ而尾ニ有柁者也云々
舜水談綺ニ云日本ニて鴛鴦ををしとよぶ鴛鴦ハ日本ニてハたゞ日本ニ

あるハ瀧輪ありといふ 神名集證夏因縁集著聞集等同説多し

鹽井

鹿塩の里ハ高遠より八里飯田へも八里ありて前岳甲斐にてハ駒ヶ岳と云の麓に有此地に塩川といふ川あり東の山より出て西へ流末ハ三峰川へ落る此川の辺ハ三子平岩より塩の井多く中にも多く出る亦二箇所有しか一所ハ洪水に埋れり今塩畑といふ所に大さ四尺ばかり雷盆形の石あり此岩中より塩水多く涌出るを汲て焼ときハ白塩となる又その味ひ鹹きこと常の塩に倍せり里人焼ずして其侭用るに味ひ焼たる塩の如し其外海満塩大塩小塩孫塩塩ヶ原塩沢など惣て七塩といふ

此塩井海水の干満に随て潮の満る時ハ岸に溢れ干汐の時にはあふれハ水涸るといふ

甲斐志曰鳳凰山下奈良田に塩井あり即此鹿塩の東に当る又井塩山塩池塩木塩石塩皆のすて代酔篇にくはし

鹿塩の内入沢井といふ所に観音堂の側に大なる鶏脚木あり囲の大さ凡丈ばかり枝南にさし延びる其さまハ乳の如き瘤のたり垂れる事数をしらず乳の出ざる婦人祈り之を乞ふてるとき乳の出ること妙なりといふ

大河原

大河原ハ山路峻嶮して何方より来るも見てずて土人の飼馬ハ小きもちに背負来て帰るなり此地ハ宗良親王三十五年の間住居ありしといふ所と云南朝の興国二年より天授元年に至て詩歌に其すひしる者といへども多くハ此所に居まして此親王ハ後醍醐天皇第二の皇子始妙法院尊澄法親王還俗して宗良親王と号す元弘二年征夷将軍に補し信濃宮と申す李花集南朝記職原抄等に有此地の上倉といふ所に深山林と云所有宮之古墳ありて親王の墳と云伝へたり此親王ハ後に七十三歳にて遠州井伊谷に隠させ給ふといへり此上倉より一里ほどて釜沢といふ所の者古鏡を穿出す親王の御鏡とて珍蔵せ

鹿鹽（かしおの）鹽井（しおのゐ）

花園侍従伴長卿

海なくて まひてよしおの 泉こそ いかなる神の こゝろしめさん

東

鹿塩大島氏 康慶

岩そゝく 塩のいつみの あらりせは やまさといかゝ 人れもよ住まし

同宮本氏 宗辰

海としは神の めくみあらはれ 井戸 こゝろかしこの 塩のいつみそ

李花集千首和歌集ハ此親王の御集也此二部ハ群書類聚ニ出

又新葉和歌集ハ弘和元年十二月宗良親王及群臣之を撰

李花集

興国五年信濃国大川原と申山のおくに籠居侍りて

かりそめなる山里のすまゐとおもひしにとしへぬる事を思ひ侍りて(?)

ふしなれぬまゝの竹(?)に鶯の百囀も昔思ひ出られしかハ

かりそめとおもふすまゐの呉竹をあはれしそのとや鶯のなく

宗良親王

信濃国伊那郡と申所にて花を待に思ひ侍る

ちらぬまにたちかへる春(?)ハ都の人にたに花をまちまし

信濃国伊那郡と申所に侍りしに(?)百首歌よみ侍りし(?)

数ならぬ身(?)

思ひなき(?)事も(?)みえぬる(?)雲の(?)山のこなたの月毎のこ(?)

信濃国大川原と申侍る深山の中にひとりこもり侍りし比

かりにとてすみ侍る庵あひの空もしく幾年ぬる月をみて侍りし

いはほかる山のをちかた見る月はいつやたのまれぬらん

信濃国伊那の山里にこもりて(?)すみ侍りしに雪いみしうふり

侍りけれハ(?)なにとなく見えて(?)わかれ(?)しかハ

帰るまて(?)都の(?)人(?)ゝ(?)ゑ(?)と(?)ゝ(?)雪(?)ふかみ(?)

信濃国伊那と申山里にて(?)侍りしか今はつれなき(?)の

春(?)たにも絶えて(?)問世(?)にありし(?)人も(?)見(?)え(?)侍る

それをたにいつやとまちし信濃なる(?)…の松風

信濃国大河原といふ深山に籠りて(?)月のさやか(?)侍りしに

待つ…人(?)なれハ(?)…(?)をまつ

ふたゝび此岩のわたりのくさむらとさへ見かへりていとゞ思ひつけられて
いまも岩谷のかたしきハ身を埋れ木とすぐせしなりけり

松島王墳

松崎の里の北に王墓と稱て大なる塚あり土人傳て敏達天皇の皇子頼勝親王の墓なりといへり然れとも日本紀皇胤紹運録等にも頼勝親王と云ハみえず以中郎元恒か伊勢兵部日近年秋葉權現を配し祀る當て文化十年の頃神祠を造營せんとて塚の四を穿崩しけるに瓦焼の偶人と多く穿出せり其長一尺あまり皆官服の体なり穿出せし器ハ元の如くに埋めたり

按日本紀垂仁天皇三十二年野見宿祢新に葬儀を議り殉死を禁し出雲国より土部百人を喚ひ埴を取て人馬及ひ種々の形を造り製るへきて陵墓に樹る後世の法に依て此物を号て埴輪といふ又立物とも号すと云々

又西遊随筆に筑後の國久留米城外に人形が原といふ所にハ數多土偶人山の様に割れあり其大さ小人のごとくにして其様神唐人の如しまた掘出せる器物なとも有しとか今猶其のハ石人石室のこともあり古日録に曰人形が原ハ継體の帝の御宇筑紫の磐石井造る石人有故に其名有とくハしくハ日本紀に見えたり是も往古の土偶なる物なれハ其人の墓なる事を知らずして深く怪む傳ふし

又下總に龍宮塚と云所の芝宍有平石を重て穴を塞く土人曰昔此穴龍宮へ通ずる事を聞て寶物を借るときハ則穴の前に出て有しが借て返さゞる者ありて爾来貸さざる事をいふ諸家にも云傳へて類多き俗説之類なれハ皇后をいふなり皇后龍宮同音相近して是を記せるなり此里つゞきに木下村に天皇々后洞あると云地名あれハなり此も土人寶を藏んとして大なる穴を得たりと云へり云々

然れとも天子の皇后の塚と謂べきハ按に配流の王子なるとて皇子塚なるべし

夫人と后と称しまゐらせんハ筑紫の磐井か如き豪強のものゝ皇風に服ふ

に潜に王室の名を偸しむるか

竹魚

駒か岳の林藪ハ篠竹茂りて川の流をおほへり

これにいかなることにや魚の化するといふ弐人の来

見て語るをもて黄帝を祭る所あるも此をとゞめ得て

北に帰りて人にも見せけるとし飯田の市岡氏

予にをくりしを見るに笹の化しつゝあるハ

ありし筆の如く後ありて筆ハ危く二寸より

あまりて其形ハ竹ににして一方ハまあるひて前ハ

魚に似たり 伊藤氏の説に唐山にて竹魚と

といひて笹の化するものといへり 又鯇の類にて山深き川の岩間に潜むものにて岩魚と云

又やまめとも云

千曲川にて鯇のことをやまめといふハ非なり

やまめハ山女の鯇の異名にていふなるのまゝ

駒嶽

駒か岳ハ木曽と伊那の間に秀十余里に連亘して実に雲風を衝くが如し俗に三十

六峯八千谿と云 續日本紀日天平十年八月信濃国献二神馬黒身白髪尾云々

駒岳の名此に出るか 宮所小野牧ハ其下にあり 今村に龍ヶ崎

あり皆是山麓の諸にて此号あるべし 馬八尺以上曰竜 赤龍清観音及び羽黒の叡詣

またこの麓を祈るも勝ありとなるも駒か岳の説に出るなり 三国物語に天正十年

織田右大将甲州を征伐して軍をめぐらし諏訪に向りて此を通り駒か岳に留る年来

に及ぶ神馬あり明年諏方の軍卒を集めて之を得んと思ふもあらじ右大将の家

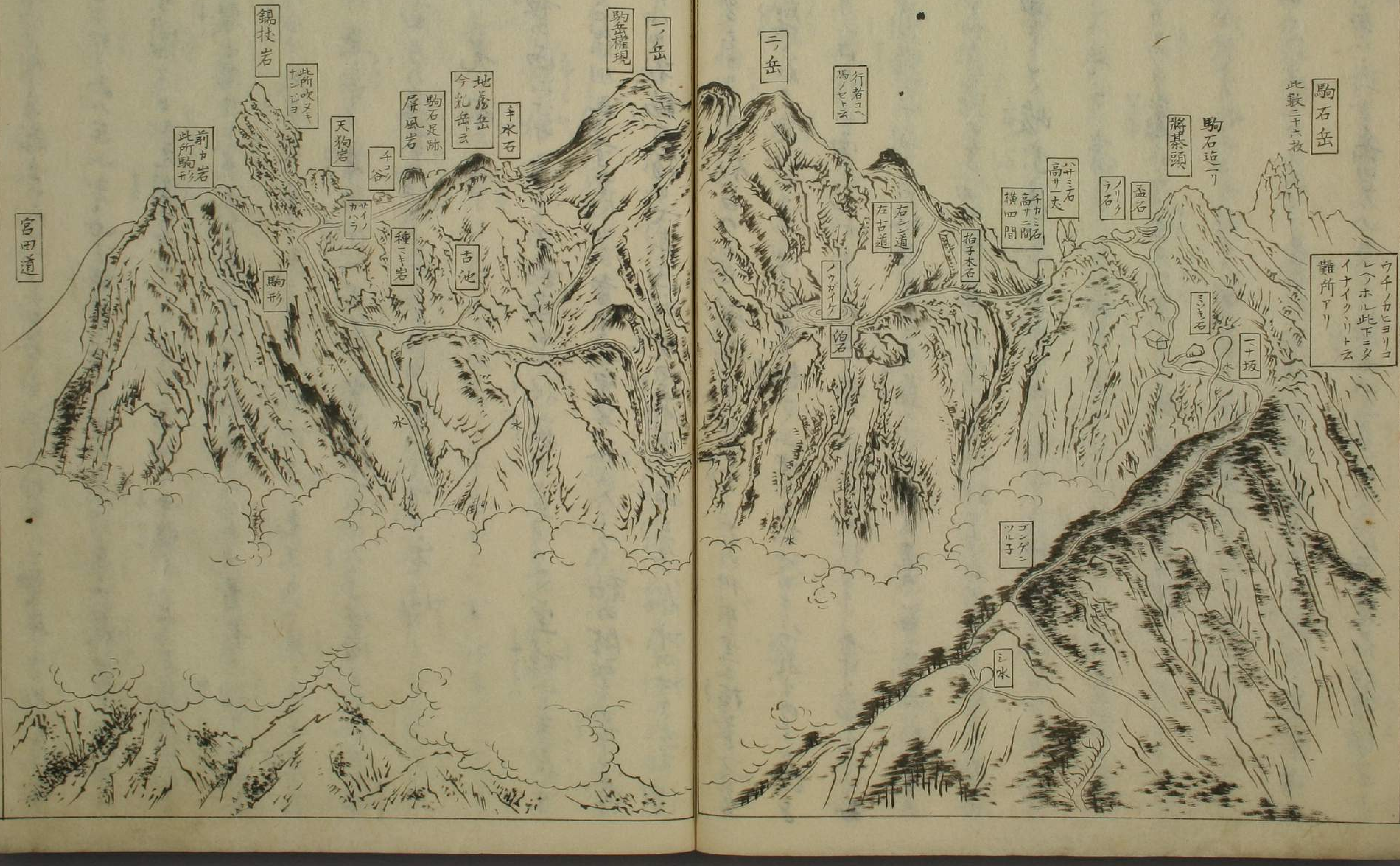
士の牧轄に飼ひしを縁ありて後に及ぶ所 是年の六月明智光秀が為に弑せらる

出てこそ漸新著聞集に寛文中尾州の有司せ山の府大なる驄を見る首
の毛尾も地まで引眼は日月のごとし恐しき形なりといへる人影を見て岑の中腹まで
静に歩行しが終に雲霧おこりて行方見えずなりしと云ふ又此山東の方よりの形しげる
大岩あるを以て号るとぞ又霊の消へ去る時駒の形一体全備してみゆるを以て
号けるとも云ふ又此駒形の南の方に権蔵爺と云ふ曽て蓑を被りて柄杓を持てる
形者方より駒をひきしくるんみゆる此形状を大豆と蒔の時節を云ふしも
処ゆる稀なり近来は辺の黒谷を通り登山せし元文宝暦の一覧記あり其大意
山中廻り九里余日数二日半を要す宮田小出より七里半二里程行て権現ぬ根と云
所より諸木繁り茂て道路もなく木の倒れたるをまたがり下を従て登るまた枝
倉あといふ木嶮岨なり延松芝の如くある上を枝に取つき登ること数十丁是より
霜雪ふりて夜も物湿ず此松の外わづかに九輪草の如き艸又黄色の百合あり常の百合

の引カ下図六
引ナリ

は少しかるをりかり紅白の躑躅花咲て少し右の艸木生じ挿るといへる
著きまゝ鳥居とありの池と云ふ都て山中に三所池あり何れもの地と
いふ此池の池東は清許山南は駒形ある山西は岳つき北は大塚あり其中に両
ある長さ百間幅六十間と云ふ水面青くして藍の如し中に黄き筋あり其形竜の
ごとく南よりくねりて北の方へ細く少し西へひろがりて此地より三町程登りて本岳
雲を帯びて南にて峻嶺重り谷々を見下せば数千丈湧したる海のごとくなる如く
白雲靉靆として是より峯まで皆巌石と畳嶮岨にして小き岩に生て
岩間白砂なり巌をめぐり又は岩より岩へ飛移りからうじて登ること十丁
余り峯は嶋と伏る如くして少し南へ長く平に菅艸に似て直ぬらすく蒼苔
生ずるもまた草なきあり岩の所々ぬるや萌に実の結びたる有頂上
より見渡せば南はうつぎ岳の大小々々飯田の方は又西は尾張伊勢浦東は小

駒岳絶頂



駒石岳
此數三十六枚
駒石迄一リ
將棊頭
孟石
ノリクラ石
ハサミ石 高サ一丈
千カミ石 高サ二間 横四間
拍子木石
右シン道
左古道
行者コヘ 馬ノセト云
二ノ岳
ノウガイケ
泊石
ミシキ石
二十坂
ウチノカヒヨリコレヘノホル此下ニタイナイクハリト云 難所アリ
ゴンゲンツルネ
三水
一ノ岳
駒岳權現
辛水石
地蔵岳 今乳岳ト云
駒石足跡 屏風岩
千コシ谷
天狗岩
此所吹ヌキナンジヨ
錫杖岩
前ヶ岩 此所駒形
サイノカハラ
種ニキ岩
吉池
駒形
宮田道

篁浅き遊山とちゝめ近里の高山なれバ遥に見る村里ハ一望平なるのことなり本
堂より狗形といへる山ハ東小にて半許あり同じ並び二丁許東に天狗岩といふあり
此岩根より廿間四方と云へ圓く中ふくらかにして末細く中腹より上ハ東西へ横木ある
定に異り又錫杖岩とて丸く不多き岩あり又岩屋といふあり首長く雉子の嘴に
似く喉の下淡白く足労絶えず少し壺を作りて指際まで毛生ひ少し平くありて左の嘴
の容にも似たり遊方にも離れ例へ寄れバ岩を伝ひて左る皆同じなるにて雄し
雄分られ此山七月の頃雪消ゑ去りぬ谷々ハ左叫びて見る宮添し

光前寺

光前寺ハ上穂の西三十丁少して不動堂あり狗嶽山と号し又宝積山と号せる寺
領六拾石天台信州五ヶ寺の内なり寺より一里半谷に入て不動の瀧あり甚だ奇
観なり三月廿八日不動の縁日七年に一度児の舞あり舞台ハ泉水の中に立て諸
ぎる道ハ泉水の傍より石橋を渡りて境内の風致よし叢に宝篋の大般若あ
里奉納の縁起に曰く往古遠州府中に天満宮の廟所り祭祀あるに毎年里民
姿貌端正の者を撰み櫃に入て是を廟の前に並べ丑の時に至て廟頭に震動して
怪神西三殺舞し信濃の早太郎今夜来りなとすやといふ神ありと答ふ
時々神櫃と毀見と捉廃禁に入る噛みに國にて其の名をて怖しく里民の恩慈
をへられ識りて曰怪力神の早太郎を訊ねて怖て早太郎ハ是何者とや社主乃ち
信陽に入て尋ぬるに当山の犬早太郎と呼ぶを当寺に請ひて犬を賜んことを乞
ふ当寺是を免す飲て彼国祀に犬を櫃に入社後に亥時に神問答如怪櫃を毀
早太郎躍出て吠て勢力常ならん怪神力を尽して戦とひへ共遂に喰殺さる
明旦里民社主往て見るに是ぞ年を経る狸之人々飲に依て謝恩の為大般若
経を当山に奉納せる彼社僧一実坊弁存自書写し其弟子淡路阿闍梨

光九供養せる所の者なり　云々

正和五丙辰卯月八日　とあり文化二年修補す文政十二年迄五百十九年

大嶋山滝

大嶋山瑠璃寺ハ天永三年比叡山の竹林院惣誉僧都の剏地にて寺外二十六石毎年三月八日楽師の儀式にて大なる獅子の形を造り壺持王と云者これを牽犢の面を被し者一人幣帛を持て前に立又鬼の形なる者二人鉄棒を以て前を掃ふ笛大鼓の拍子につれて古雅なり

寺より一里余洞を渉て滝あり二十尋落下りて中段に滝壺あり是より下も又二十尋と云

闘龍

文化五辰七月廿五日雷雨すさまじく暴風吹起り山林動揺して黒雲地に落き霆電四方にひらめきあとぬき枝を割石をとばす故に民家戸を閉て開くことあたはず

只今天傾き地陥らんとおそろしかりしといふばかりなりし翌日風雨晴て其辺を見たる
此烈風の為に樹木こと〴〵く折れ倒れたることおびたゞしこゝに吉田村の百姓与市といへる
もの龍の皮を拾ひ得たり脇の皮と見えて六寸四方もあり青白の光ありて石决明の
如し其頃遠近伝へ聞て見るもの日々に市の如し　又其頃山吹村の者藤葉採に行
て是も同じく五寸ばかりの皮を拾ひたり其辺の医家又好事のもの少し許づゝ分
得て秘蔵せしとぞ

按ずるに闘龍のはなしは古より闘龍の説あり感通伝に曰貞観十三年
龍大に闘ふ雷霆震撃水火交飛やゝありて乃静まる塔廟もとのごとし
人皆龍の毛を拾ひ得たり長さ三尺許其色黄赤なりとぞ又北越にて寛
政三年八月朔日信州の西江戸巻の倍なる池水より起て闘龍の事ありしと云

三足鶏

信府奇談に近き頃大泉といへる里のある家にて三足の鶏を生せしことありし輟耕
録に三足及四足の鶏の事見えたり又十年前高井郡福原の里にて両頭四足の鶏
を生れしと云　文政九戌年川路村にても両頭四足の鶏を生れ是を見てあれは四足なる
は二羽なるが一つにくつゝきたるなりそれを見るに是ハ毎く首とひとつ三足ハ尻に手なる事とぞ云へり

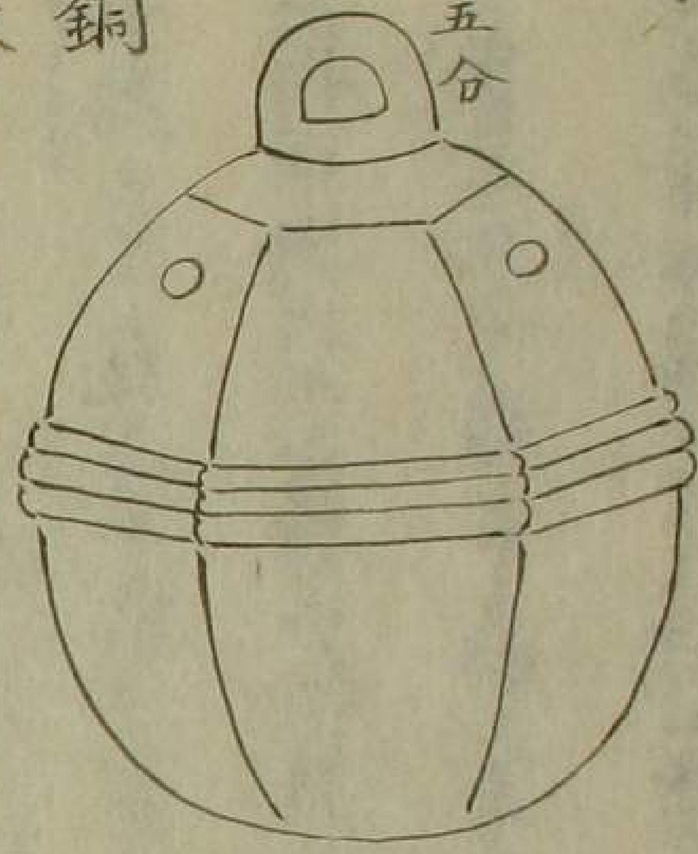
雲彩寺古物

南條の雲彩寺ハ白鶏山と号くいふなる由縁や有らん譲るに此地ハ鎌倉の権五郎
景政の旧跡とて庭に石塔もあり又ハ夢想国師の開山とも云り本尊聖観音本
郡三十三所の内二十二番の札所寛政六年寺建替の時境内を広ハめんとて寺の
後背を穿けるに積石ありてこゝに一つの洞穴あり十間余も崩しけるに猶奥深
くして奇なる寺の後背に洞穴さまくあり中ハ暗くして大なるものハ左右に積石
ありて是を卧龍山と改む此洞より取出せしもの如図此品々を分配して今もな

雲彩寺駅鈴圖

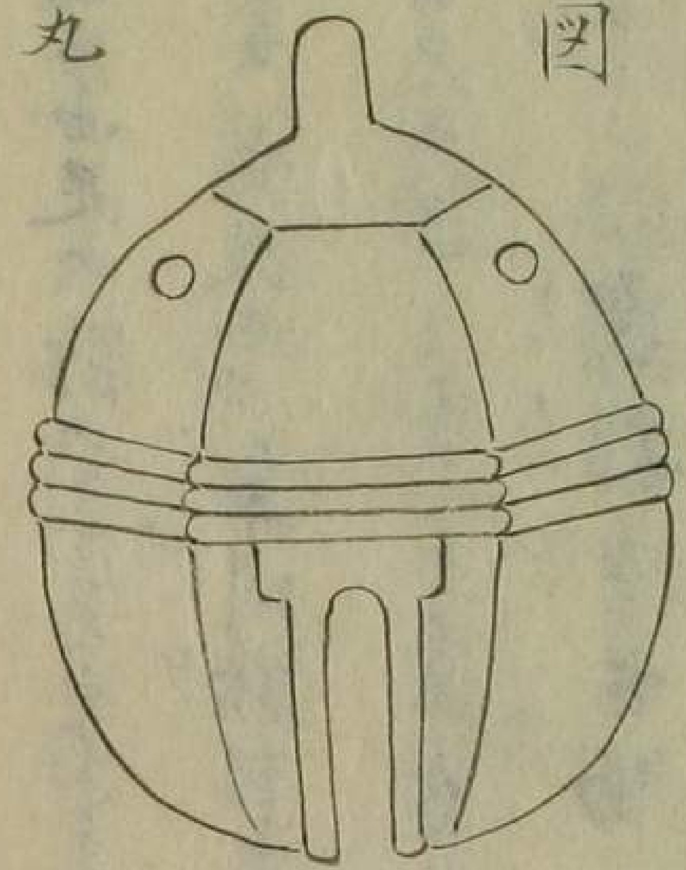
高三寸

其質銅
黒如鉄



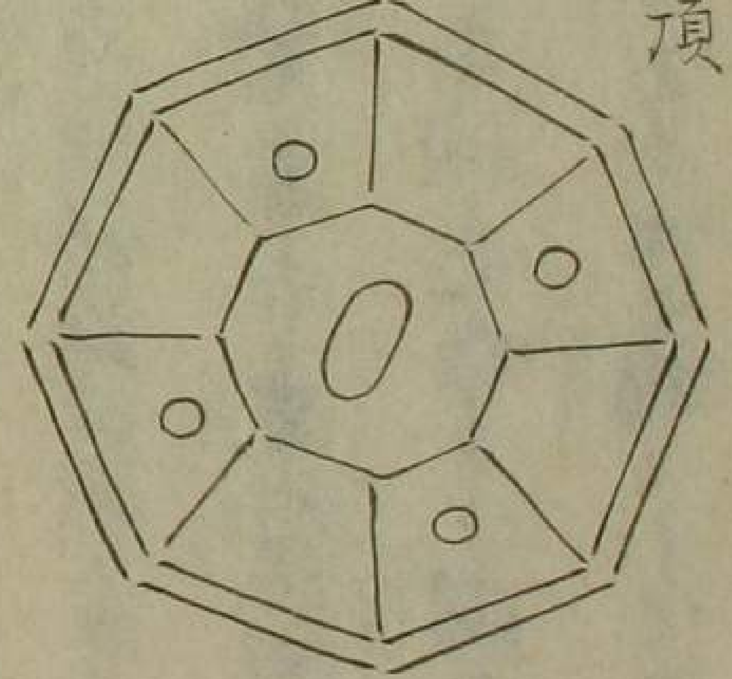
横径二寸五分

横図

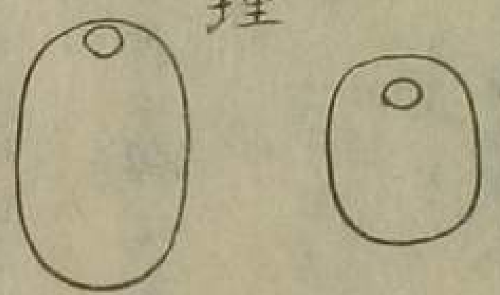


鈴中之丸
物小鈴也

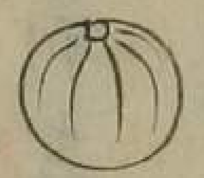
鈴頂



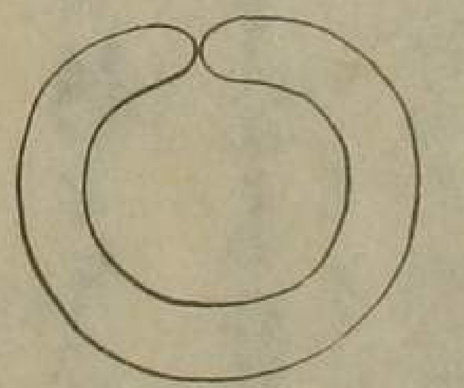
瑠理



金

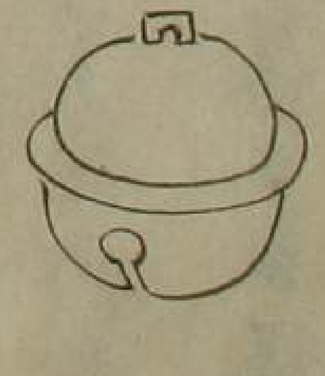


金環

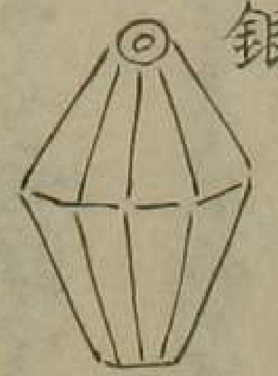


銅蟇
高三寸
長四寸

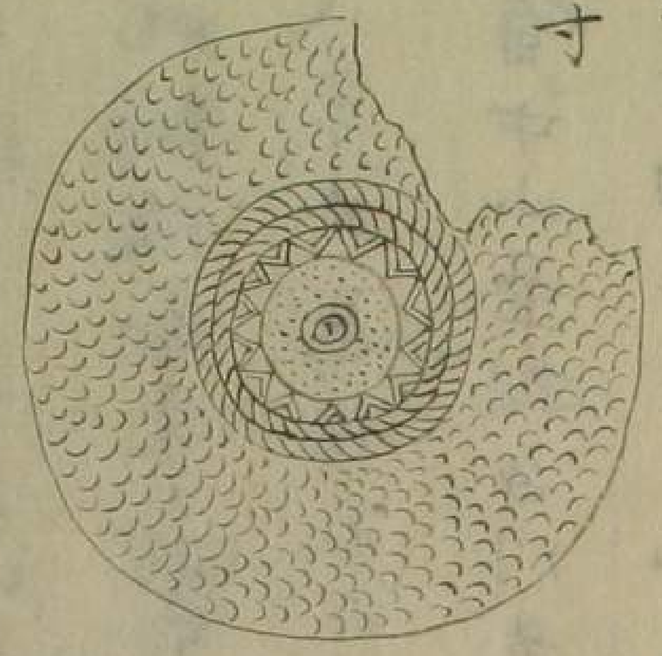
カラカ子



銀



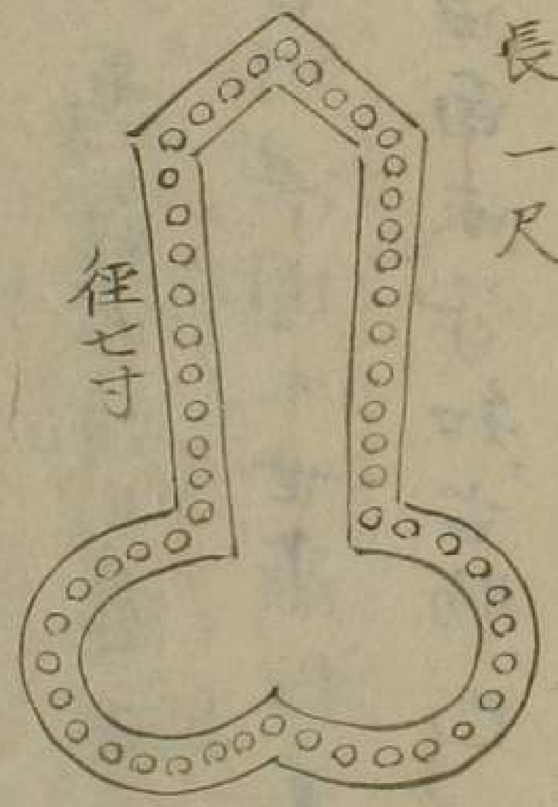
古鏡
三寸



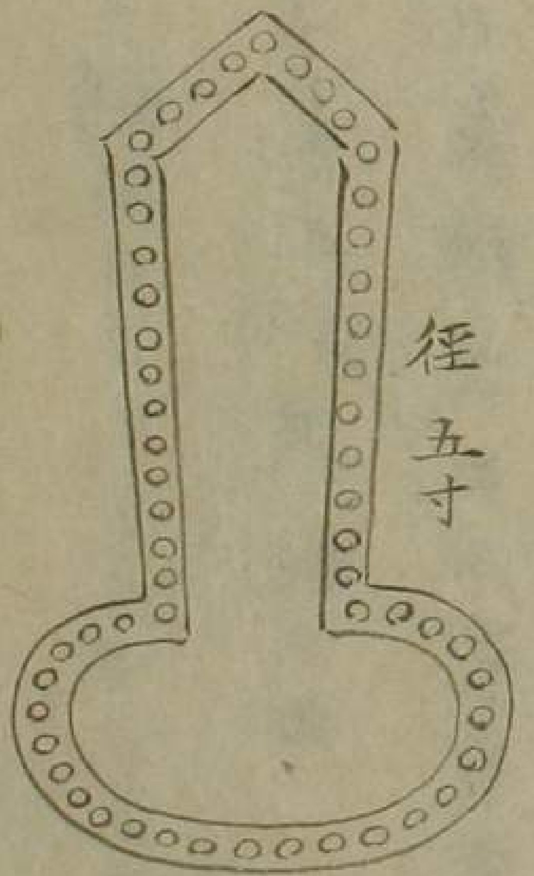
文化年中
但馬国
二方郡
ニテ堀出
金器
此図ニ似タリ

滅金長五寸径三寸

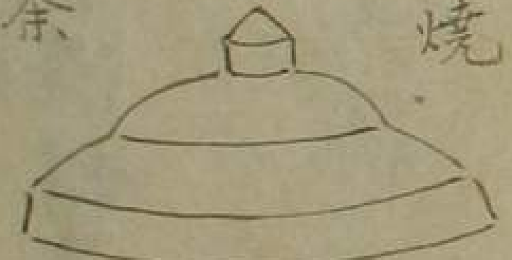
銅長一尺
径七寸



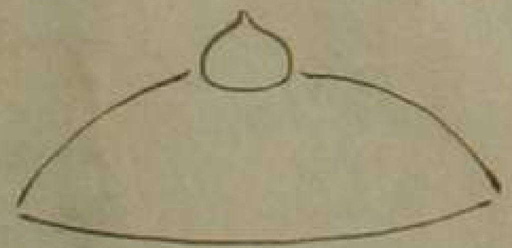
同
径五寸



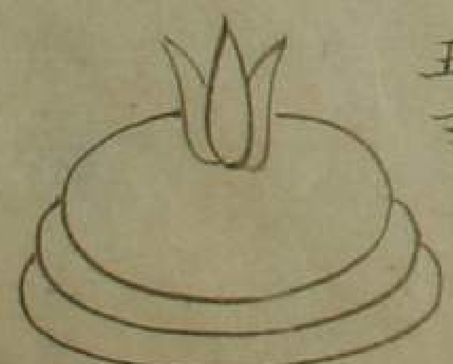
素焼
径五寸余



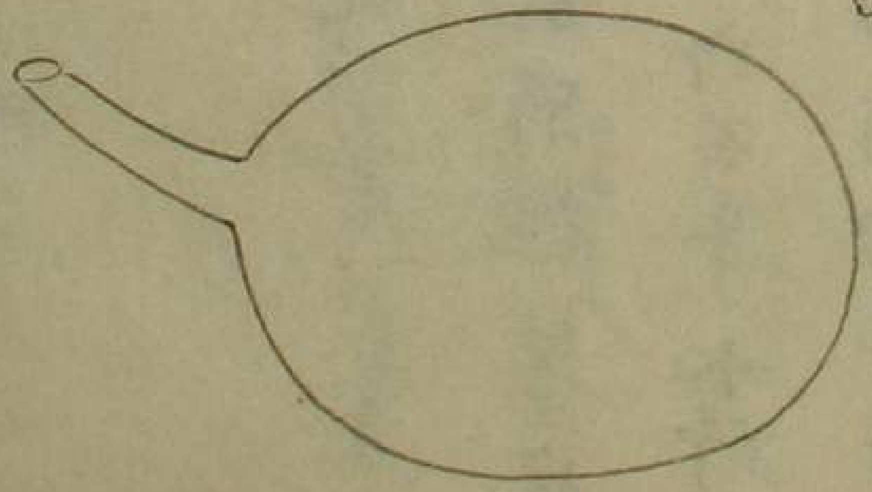
同



同
五寸



素焼
上無口



存する鈴二ツ瑠璃の玉一ツ銅環一ツ有のミ此外滅金の浮漚丁二三百朱梡馬具
釵刀の類有しかども朽敗なりといへり又上溝村の一民畠より一箇の鈴鏡を穿
出せし鏡ニ五鈴あり今小祠中ニ納む

銅版

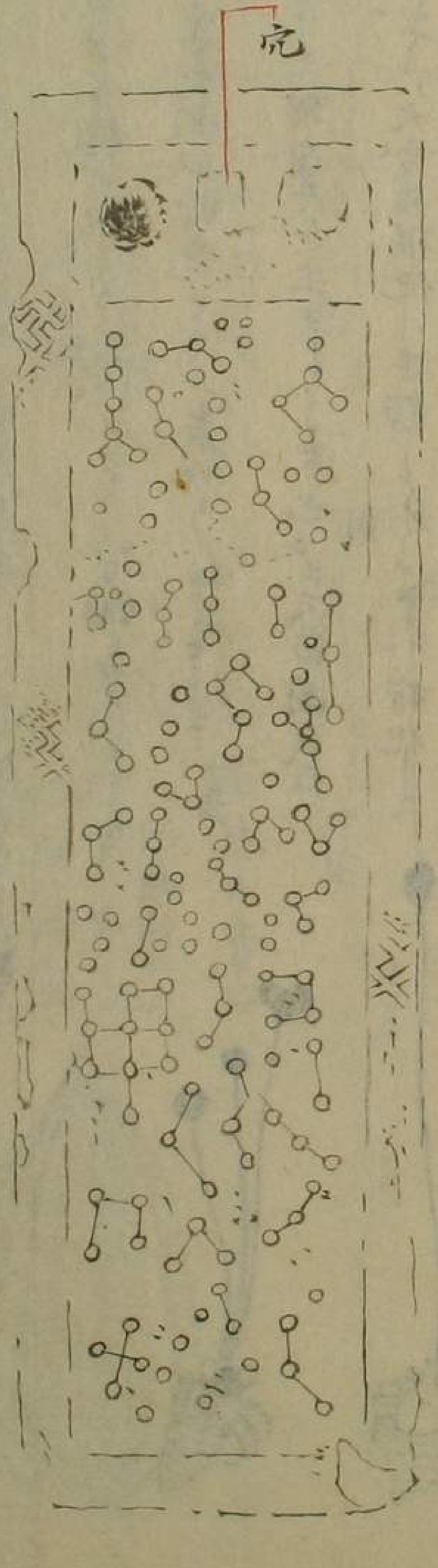
飯田の茶来といへる老人の所蔵ニ銅版あり是も土中より穿得し物といへり諸所
鑑定を経るといへどもいかなる物とも知れず其記ニ曰

此銅版茶来翁所珍蔵也表鋳出日月星辰裏有大同二年丁亥孟秋
八字其為物不可得而識焉翁因持之遊東西之両都所経鑒定
自中山亜相白川老侯至皆川淇園木世肅伴蒿蹊木内石亭水野白
應塙保己一亀田鵬斎太田南畝皆知古物已不知為何物也翁又
持之帰千家以為書齋之物使予志此事尚俟識者之出云

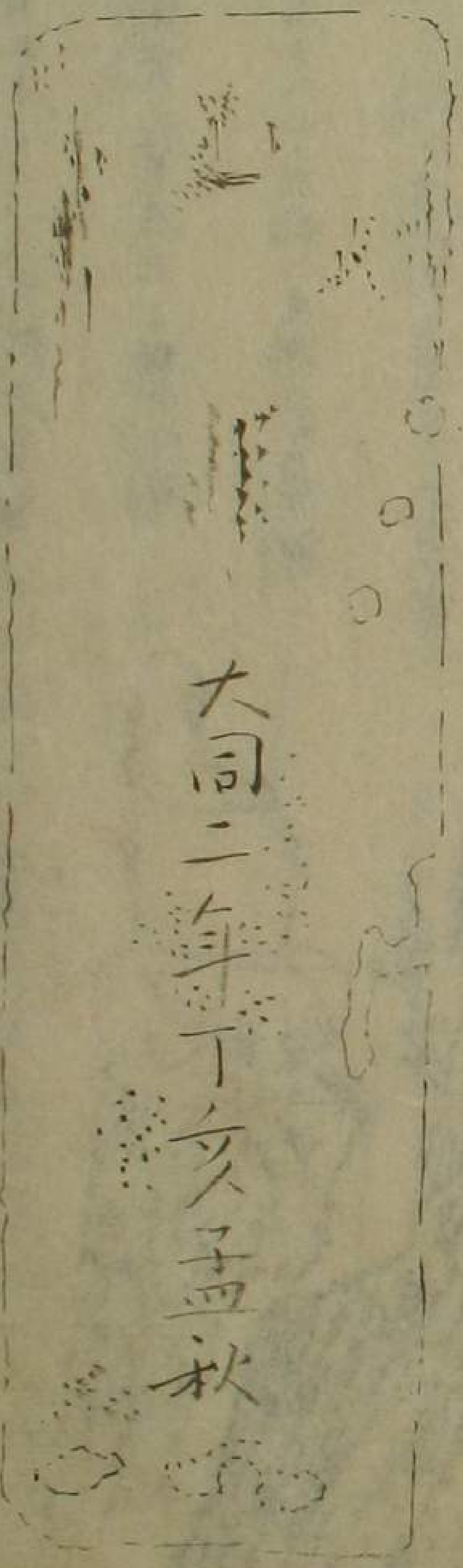
文化丁丑臘月二十有八日　圭陽水沢貞應霈

銅版

表　長一尺六分

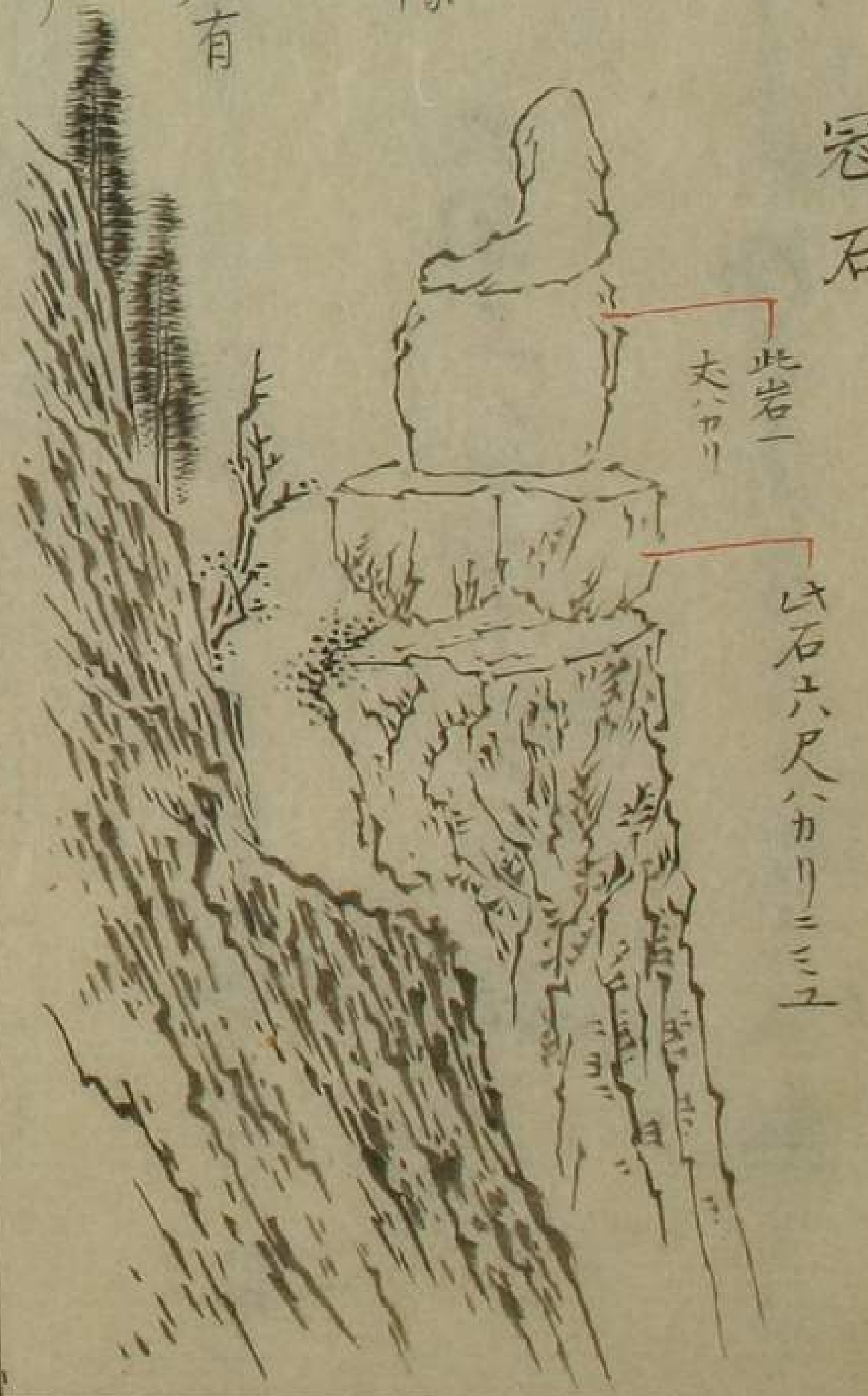


裏　幅三寸一分

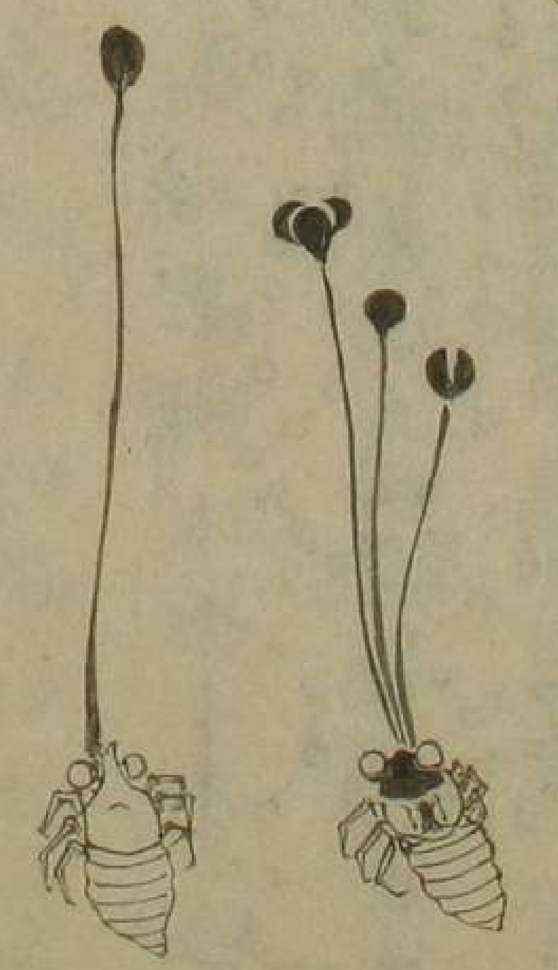


大久保の里ハ大石多し天龍河の岸に臨てすゞ石
蛇石夫婦石鞍掛石有山をよりて大鼓石有折ハ
大鼓の響有硯石六七間穴に有其上に駒の爪石
蹄の跡有又草鞋の跡ある石ありて天狗の足跡と云産神
を箱石明神と称祭る其祠の後背に箱石と云石有
其上に冠石有大さ六尺許四丈許峙てる盤石の上にあり

冠石

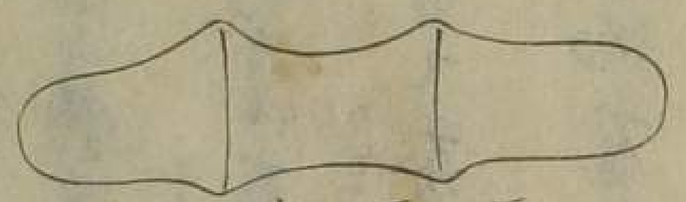


飯田の城外松林の中に蟬の殻より菌を生じたる物ありしを
蟬茸と云金匱要略記聞曰蟬花といふ者あり和名セミタケト云
蛴螬ノ蟬に化シソコナフテ頭に茸を生しまる者也と云又市岡氏云
虎岩村の内北原の里にてハ大麦の根化して蟬と形るされハ蟬化して
茸を生じたるにハ非ず茸の根より蟬を生じたる
なるべし



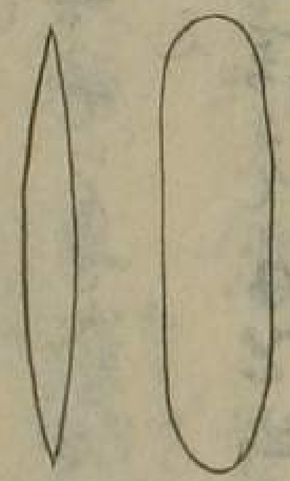
誕生石

此二石
園原ヨリ出ル



長六寸六分
灰白色
少シ平メ有

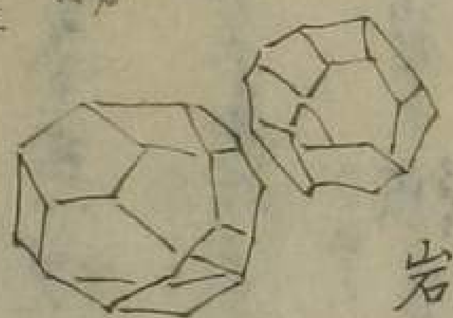
面　横



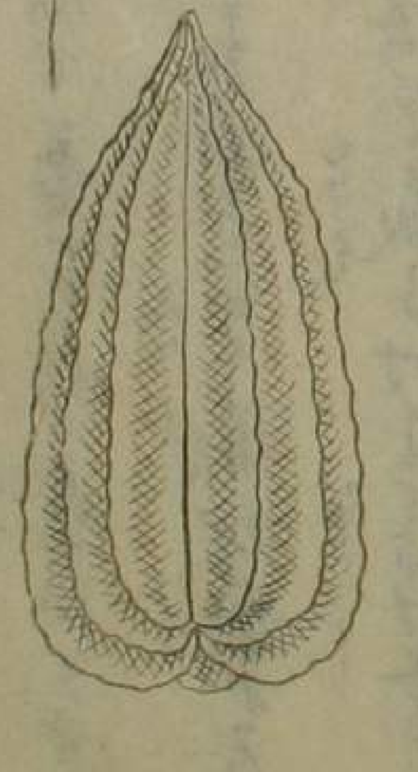
七寸九分

民家に持伝へて婦人産に臨む時是をもちて擁りしより因て誕生石と名つくと云

八方多賀根
遠山産
雲根志三編ニ云如此物和産有事未聞漢産又不詳最奇品可愛物也



岩木の寶石
川路村の山より出
袖り洞と云所木化石多し

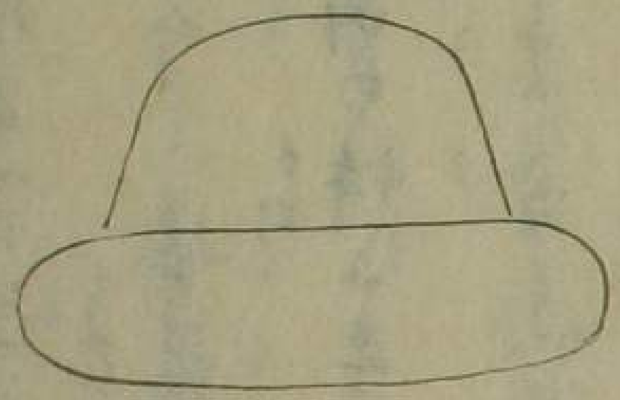


長一尺五寸二分
色青黒

霹靂石

安永年中嶋田村雷雨烈風にて山荒洪水の後谷川より流を出る

神代石
竪二寸七ト
横三寸六ト



十年前風越山ヨリ出ル灰白色

以上 飯田 市岡氏蔵

山吹畸人

寛政年間山吹の里に吉浦玄眞といへる醫師あり何方の人といふ事を不知妻もなくて
只單身にてくらしける其性寡欲放誕にして細節に拘らす一時人にたのまれ或村飯田に赴
きある富商の許に立よりしに當時水無月の土用干とて多くの衣服を晒せし中に祭
祀の時諸子の着るへき料に調じたる模様の大きやかに華やかなる襦子を見てこ
よなく愛しみ己着てみるといひたる其視る事もの語て着せけれハ喜びて身に
纏ひ甚意暢て興しける彼者便所に立行し跡にて其まゝ出て是を着て家に歸り
人の怪しと咲ふをも省ずして家に歸りける彼方にてハ衣服を藏る時に一領足ざれハ
僧ハ醫師の着て歸しにやと人を遣して見せたるに其襦子を着なから家に伏りをり
しとなり譯く病者を診えるに無言にて手を出さハ脈を考て薬をあたふ病者の
極体委く訴るときハ固辞て懲病症の明に知れる者なるハ何ぞ其薬を用ひざる

吾ハ其精に至りすきて薬をあたへん又藥事に人の藥料をわするるハ傍の棚におく
べしとて更にもふれず當人來りて賣物の價を乞ハ棚を指して彼所にあり取へき程
持ゆへしとて其人の取去るに任せり或時一夜盜賊來り壁をこぼち入て器物衣服
を取て行けれハあたりの人見付て捕へんとて主翁に問へハ
去るなん有る家の貨ハ皆とられぬとぞいへるもおどろけなるひとり甚いんでたり此盗ちつくろひ
其ときいへハいかさま彼盗人ためにつきて又来りなん時ハあしかりなんとて盗もはくる
よびてやるべかり後てせんハのかれげのさ世の人にハ驚りて種々のまたことなりけるとぞ
こふハ首きれ

春田折

鳴田の里ハ育良庄降旗の郷なり此内に笠村と云所あり此所に住めるを呼で笠の
者と云家十軒餘是に住こと年歴久し古より此者等毎年正月より二三月まで春

田井といふ所をとおらひ舞て郡中を
廻り米銭を乞ふ事なりまた他国に見聞
せざる事也何れのおどりよりも珍しや詳なり
らび先二人つゝ一組として四組あり一人ハ
二面を懐中し一人ハ大鼓を打つ袋を
脊く此面至古雅なる物也何れも檪木
の面とよんぞく 赤銅面彩色面当時のお面
つり眼ふとあつく二面の内一ハ女面也始
男面を被り中半より女面とかへる也
しまひにハ定まりて舞ふ田井村收まり
事をとるハ飯田の侍醫太田中彦右衛門

岳 ［印］

ありがたき世書きしたところなりき
侍医の奥の方一人。侍医のおくのあり緒。千めり方ルやうなせ。其の日お永く。緒
ハ細かをめぐる。緒ハさいくの所よ。のことハ小行の名絶。まことおぼえいふや
とひて。ハさき長の緒ハ。ちさ紀なぐを切すげて。先ハ小のまきが子なり。南の村
ハ々なり。みなやたりなり。お田の中へまゐる。苗代と打やちなりと定めて。一緒ハ
千石。二緒ハ二千石。三緒ハ三千石。うるひのせる之ハ。器
桜よ侍医の奥の方一人と云ひ鎌倉の方所の方座なるとなるの所なると
いへり是ハ北条家桃橋のうしろより云つたへる洞あるべし

白山窟

上飯田の白山寺ハ鳳凰山と号 宗 天台 山の麓にあり 鳥井より宮迄登る事 五十町なりとぞ
白山権現の神祠あり 九月 例祭 又十丁登りて岩洞あり 洞口甚だ隘く 肥満の人ハ入がたし

常躰の人ハ薄衣にして入数十歩にして方二間許の所に出る此に四尺余の窓穴あり
又傍の地に穴あり二間ほど下り横へ行事七八間にして又薄き所あり此にも窓穴あ
其天井より此穴より覗けハ山谷すべて別世界に出るが如し此所に精霊に
して山焼の容易に塞がり是より奥へハ水流て通り難くして入人なしと云

園原

新古今
そのはらやふせやにおふるはゝき木のありとはみえてあはぬ君かな　坂上是則

保元哥合
こはた刈そのはら山の楢の葉をしけみ木の間も秋の夜の月　源仲正

永久百首
みちのくのしのぶもぢずりそのはらまてもまちこそゆけ　六條院大進

園原遺韻播ニ詞林一　幽僻誰人カ復續テレ吟ヲ
祇不レ見レ君何ノ所ニ在ル　空山一樹古今ノ心　韓天壽

園原ハ往古の官道にて昼神坂より五里余の恵那山嶽神坂峠を越て園原に至る
此間旅店布施屋ハ大同年中傳教大師美濃の境内に廣済院信濃の境内に廣拯院を立旅人を休しむ今駒場の長岳寺前原の観照寺ハ右両院の跡とぞ
古の両寺にて八石

園原より育良の野の間川を隔て昼神村に出（此地式内阿智神社あり圭田十石）洪水に道崩て往絶
今ハ網かけ渡りかゝりて小野川に出る山路の古道ハ荊棘の中にわつかに残りて土人の
跡ありといふ　此道筋を穿けれハ多く古陶器の欠けたるを出すと
又昔のゑきすを呼ぶものハ檜多く其本ハ五圍余末ハ七ツに分れて一樹
森をなして尾上の本乃梢に秀て是ハ此地人の質朴にして正直一片に
なるのことゝ古代のありさま今に残る地なりける
此里にすゝきしの小祠あり信者にハあられ炭を焼を業とす　又金責吉次ら葛篭
然るの上着を俗説多しといへども第一の産物とす

園原　伏屋の里　はゝき木

新古今

志なのなる園原にこそ書る
ゝゝきのあるとはみえて
旅人のよりて
たちあふしるべを

藤原輔尹

立寄りて
さゝふしのみぬ
ふせ屋とはいへ
かひなかりけり

白雲の上より
こゆるあしひきの
山の高根や
みさかなるらん

能因

立石

立石村ハ飯田より三里南にて千頭山立石寺と云寺あり 真言宗 圭田十石 観音堂あり 寺の東十二三間隔て沢の辺に立石と云る石あり地上に出る事凡二尺余径一尺余石色青白にして指にて推ハ少しく動くが如し 宝永の比受領の有司多の人夫に指揮して石の四面を堀せけるに数日穿といへとも其根のきハまりハ知れずといへり 竟に原の如くに土を埋め四面に柵を結て人をいましめ給ふ 又此一村ハ乾柿を業とす 親木と云ハ三囲ありて柿の核なし 此核を接て一村柿株となる 立石柿とて名産なり

本郡石類ハ上飯田正永寺辺より石鏃を出せり 其品之大島村より貝石を出せり 又下條阿佐ヶ(?)より出る種々の貝石あり 又木葉石あり 虎岩村角石鉄の如し 自然銅之武石に似たる 其外小野の針石英大島の石瑪瑙大河原の伽羅石鹿塩の蓮石等なり

蘿蔔石

大山田神社 鎮西之村にあり 圭田十石祭る所 大国魂命 此地往古よりも云 中古為朝の二男大嶋二郎為家伊豆を遁れ参河の国足助に至り左兵衛重長 為家婦聟 の許に忍居 後此地に来り社司の弟となせ 其女を妻とし 父為朝大将に配流となりて大将を氏とし 又為朝の霊を八郎明神と並祭る故にいつとなく鎮西村と呼ぶとや 此境内に異石あり 平石の面に大根の形あり 葉ハ青く根ハ白く悉く画き彩るが如し 其地の西の谷川より土人見出し進ぎれ社地へ引となり

蘿蔔石

石色 淡青白
惣長二尺許
横一尺寸余
両葉青中ハ少シ赤ミアリ根ハ白シ

深見池

深見の里の産社の森の辺一年自然に土地陥入て凹となり径二丁長三丁ばかり水
溢て竟に池となる旱りにも水涸るときハ森林の梢水上にあらハるといへり
地の落入しことハ呉国にも後漢書晋書北史本紀等に挙て怪異とせず断に
其ゆゑを弁じたり

早梅花

疊秀山開善寺ハ 上川路に在 寺田三十石 京都妙心寺に属す建武二年小笠原信濃守貞
宗の開基にて開山ハ宋国帰化の僧清拙正澄和尚謚大鑑禅師什物に亀加衣沙衣と
云あり最古物の羅物織にて綸子形のごとく色ハ白茶の如く環ハ鼈甲にて回り八角
丹花く根を西覆輪とす尋常の輪よりおほきにて両すぢより管の蓋に有しと云
嘉暦元寅年追テ禅師之船来ル筑紫博多浦ニ以テ故世々相傳テ号ニ亀加衣沙衣ト
矣云々

早梅花の古木の跡ハ大門の傍にあり遺種ハ陸国にあり八重の白梅にて香高く他
の梅に勝り実ハ小にて他邦に信濃梅と称する物なり

一書に開善寺の早梅花ハ名高ふ名木なり村上頼平の家人堀科文治と云者
武田村上戦場の隙開善寺の梅々を盛を望て寺よりうけつゝ香をめでて
ひそかに梅の枝をぬすみ梅さく花人のみ
とらへ諭しとる事にハあらねバ黒ひらけじ入るをせぬ女性一人めの下ハ一人ぐ
して出来れり○のあるさかりとみえて白き小袿に緋の袴出で夜衣を著せ
やよ君なる ある時表着なる夜衣の
おもふことなく梅の下ゆきねむりひ其の○あらん月にえみし花をむかひて
なかむ色ハえらふぬむらしが文ひまれおもひけむ梅の枝をえ
とらへて書きしやさしひ居る文治に示をえて書子かくてひよりつ

袖のうへに落て心なく梅の花枕にきゆる夢かとぞ思ふ

といひけれハ女答し

其之乃手枕の聲此梅なるハ袖ての春けの袖にふれん

とのみくたくひまとりふくにきろくが思ひの数多ぬれし酔ぬれて羅浮に明

かるなり夫の夜なこ雲たなびけれハ袋なとろ心袖ぬりさて夢あり

に文孫にひとり梅の木なりけるにして女もめの室ハもとちれん見え

き月も覚ぬ落くる名ハ我身をも讃れり是ハ龍もなく庭の梅花の精

精なるへしかくて陣風に乞りて初秋も西ひの思出れるさく夕暮になる

ぬれハ心ころに立つきさらやまぎりなくての九思ひまぬなし

梅の花に身をふ舟とのいうあれハ女鬼ことどにまさされたる

と語しものあるさなくやむかしんをも此の日にて死にけるなく

摘要

是ハ師雄が羅浮の一睡

范至能梅譜云早梅冬至前已開故得二早ノ名一

篤信花譜ニ凡冬至より前に開を早梅といひ山中平原又地の寒温によ

りて花の遅速あり

信濃奇區一覧巻之四終